豊かな子どもの読書活動をめざして

（報告書）

平成２０（2008）年度

平成 21 年３月

大阪府子ども読書活動推進連絡協議会

は　じ　め　に

平成 14（2002）年度から、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会を設置し、府域の子どもの読書活動を推進してまいりました。(注1)

平成 15（2003）年 1 月には、「大阪府子ども読書活動推進計画」が公表され、その計画にもとづき「連携」をキーワードに事業案が立案されました。

そこで、平成 15（2003）年度から、読書活動に取り組んでいるボランティアを支援するための講座「子ども読書ファシリテーター講座」「おはなしスキルアップ講座」を行い、受講者の交流会も開催しました。この講座は、3 年間の予定でスタートし、平成 17（2005）年度に終了しました。(注2)　さらに、平成 17 年秋に大阪府域の学校・図書館・ボランティアの方を対象に子どもの読書活動に関するアンケート調査を実施しました。

平成 18（2006）年度から、文部科学省の委託を受けて、市町村でモデル事業、オーサー・ビジット、講座・講演会を行ってきました。

平成 20（2008）年度も、文部科学省の委託を受けて豊能町で乳幼児期の子どもたちの読書活動を推進するために地域のネットワークづくりをめざしたモデル事業、箕面市の中学校と大阪府立国際児童文学館でオーサー・ビジット、中学校への子ども読書応援団派遣事業および今年度の読書活動報告会・講演会・交流会を開催しました。

ここに、今年度の成果をまとめました。ご高覧いただき、子どもの読書活動のよりいっそうの推進に役立てていただければ幸いです。

注１　平成 14 年度は大阪府子ども読書活動推進連絡会議という名称でしたが、15 年度から大阪府子ども読書活動推進連絡協議会に名称を変更しました。事務局は財団法人大阪国際児童文学館が担当しています。

注２　これらの講座は、大阪府教育委員会・財団法人大阪国際児童文学館主催、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会・開催図書館との共催という体制で行いました。

もくじ

はじめに ……（1）

講演会「10 代の子どもの本を書く」

（花形みつるさん） …… 1

＜大阪府域での子どもの読書活動の報告＞ …… 25

Ⅰ 「乳幼児と絵本：ゆっくり子育て講座」

（豊能町立図書館）…… 28

Ⅱ-1 「オーサー・ビジット：田中清代さん」

（大阪府立国際児童文学館）…… 30

Ⅱ-2 「オーサー・ビジット：花形みつるさん」

（箕面市立第一中学校・第二中学校）…… 32

Ⅲ 中学生を対象とした読書活動

「中学生におはなし・絵本をとどける」…… 40

講演会「10 代の子どもの本を書く」

報告日：平成 21（2009）年２月 26 日（木）　13 時 45 分～15 時 30 分

場　所：ホテルアウィーナ大阪

講　師：花形みつるさん（作家）　聞きて：土居安子（財団法人大阪国際児童文学館主任専門員）

主　催：大阪府子ども読書活動推進連絡協議会

１．オーサー・ビジットと大阪での 2 日間についての感想

土居（聞きて）

まず、最初に事業を引き受けてくださったきっかけをお話しください。

花形

人前でしゃべるのがにがてで、今も緊張しています。講演などを頼まれても、ほとんど断っていたのですが、去年の秋に、小学校の教師をしている友人から、「部屋にこもって書いてばかりいないで、たまには子どもたちの前で自分の作品を読むような機会を作ったほうがいいよ」と言われまして、「そうだな」と納得したすぐあとに土居さんからお電話いただいたもので、「これは運命だな」と思って引き受けてしまいました。

土居

オーサー・ビジットの第 1 日は箕面市立第二中学校で第 6 限に中学 3 年生 1 クラスで実施していただき、放課後、子どもたちと交流会をしていただいた後、子どもたちからサイン責めにあわれました。そのあと、箕面の学校図書館司書さんと夕食を食べながら交流会がありました。

次の日は、朝から箕面市立第一中学校でオーサー・ビジットをお願いしました。１年生が対象で、第 1 限 1 クラス、第 2 限 2 クラス、第 3 限 2 クラスと、3 時間連続という実にハードなスケジュールでした。花形さんのお友だちのひこ・田中さん[1]にそのお話をしたら、「そんなハードなスケジュールを頼んだのか」と言われたほどでした。実際、行ってみられていかがでしたか。

花形

延べ 230 人あまりの子どもたちが対象で、しゃべっているうちに、なんだか芸人になって巡業をしているような気分になりました。でも、土居さんがフォローしてくださった上に、子どもたちも熱心に話を聞いてくれて、来てよかったと思いました。

箕面市立第一中学校も第二中学校も、とても雰囲気のよい学校で、たとえば、第二中学校は、床もぴかぴかでお掃除が行き届いているし、第一中学校の方は、ちょうど校舎の建て替え中でプレハブ教室なので、隣の授業も聞こえてくるというようなバイリンガル状態なのに、生徒のみなさんは本当に落ち着いていて、両校とも「きっと、先生たちがすごく子どもたちを大切に育てていらっしゃるのだな」と思いました。以来、私の頭には「箕面の中学はすごい」とインプットされてしまいました。

土居

「アート少女」[2]を取り上げて、登場人物に対してメッセージを書いてもらうかたちですすめましたが、子どもたちからのメッセージは予想どおりでしたか。

花形

中学生の意見は、忌憚がなくてなかなかよかったです。一番気に入ったメッセージは「巨乳猫耳少女、最高！」でした。

土居

そのことについて、少し説明していただいてもいいですか。

花形

「アート少女」は、補習授業用の教室として校長に部室を没収されそうになる美術部の物語です。それを阻止するために部員がビラを作るのですが、バックのイラストとしてドイツのデューラー[3]の重厚な芸術作品をコピーする予定だったのが、オタクの部員が「巨乳猫耳少女」を描いてしまいます。「巨乳猫耳少女」とは、顔は幼い女の子なのに身体は豊満なお姉さんで頭には猫耳がついている、というオタクの男の子たちに大人気なキャラクターなのですが、そのビラを見た校長が激怒して、美術部をロクでもない生徒のたまり場で存在する価値がないと決めつけた、という、小説の中では重要なアイテムとなっています。

土居

中学 1 年生と 3 年生の違いは感じられましたか。

花形

3 年生は、仕草とか、言葉とか、ヘアスタイルとかに、くっきりと個性があらわれていたこと。1 年生は、200 人近い子どもたちに次々に授業をしたので、細かくは観察できませんでしたが、小学生のように小さいかわいらしい子から、180ｃｍぐらいはあるようながっしりした男の子や女子高生のような女の子まで、その違いが興味深かったですね。

土居

放課後の学校図書館での交流はいかがでしたか。

花形

おもしろかったです。とても 15 歳とは思えないほど話術の巧みな男の子がいて、もうしゃべる、しゃべる。それで、しゃべりながらも、みんなに気配りし、「君、どう思う？」などとじょうずに仕切ってくれるのです。私にまでふってくれました。おばさんの好きな話題にも通じていて、並みの才能じゃないと驚いてしまいました。

また、子どもたちの言葉づかいがいい味を出していて、「さすが大阪」と思いました。放課後の交流は、一生忘れないくらい楽しい思い出となりました。

土居

交流会の参加者は、花形さんを囲んで座っていたのは中学 3 年生の 3 人グループの男の子と文学少女 3 人と図書委員の生徒が数人でしたが、「一緒に中に入ったら？」という誘いに「だるい」と答えながらもずっとまわりで聞いている 1、2 年生の生徒たちがいました。会話の中で、「メイちゃんの執事」[4]というテレビドラマの話が出てきましたね。

花形

何が欲しいかという話になって、ひとりの女の子が「執事」と答えたのを受けて、男の子たちが「メイド」「妹」「スクール水着」が欲しいと言ったところ、司会役のその男の子が、「スクール水着は妹にもれなく付いてくる」と言った時には、大笑いしてしまいました。

このように会話が次々と展開して、これが大阪の文化なのかと感心しました。ふだんの会話でも、まるで漫才のようなノリなのですね。司会をしていた男の子は、将来、芸人か作家、もしくはプロデューサーになれるのではないですか。

土居

メイドの話をすると、まわりの男の子たちも「欲しい」と言って手を挙げていました。学校図書館という場は、本を読む場ですが、それと同時にリラックスできる場で、何でも言える場です。花形さんに自分たちの文化を伝えたいという子どもたちの思いがすごく伝わってきました。

花形

子どもの文化を垣間見ることができて、私には大変刺激的な場でした。

土居

『アート少女』[5]の本にどうしてもサインが欲しいという中3の女の子もいて、それぞれの子どもたちが花形さんにいろんな形でアプローチしている感じでした。

そのあとの、箕面市の学校図書館司書さんとの交流はいかがでしたか。

花形

中学生と話し合って脳が加熱していたあとに、女性の学校司書さんたちが大阪の言葉ですごくやわらかくしゃべってくださったので、癒されてほっと力が抜けました。

みなさん、小学校と中学校の司書を両方とも経験してらっしゃる方々で、とてもよく子どものことをわかっていらっしゃいました。司書という存在が学校にどれほど必要なものかということがわかりました。ひとりひとりの子どもたちをよく見ているうえに、学校になじめない子をちゃんとケアしていらっしゃるのです。よく「保健室登校」ということを聞きますけれども、「学校図書館登校」といってもいいほど司書の方たちがいろいろな子どもたちのフォローをなさっていて、先生たちも見逃してしまうようなことを把握しておられるので、それが教育に反映できているのかなと思いました。それもまた、箕面の中学校が落ち着いている一因なのかなと感じました。

本当に、一校に一人は司書さんが必要ですね。私の娘が通っていた小学校も中学校も、司書さんがいなかったものですから、図書室はほとんど本の物置みたいになっていて、埃をかぶっているし、何がどこにあるのかもわからないという状況で、本がかわいそうでした。

土居

箕面の学校司書さんとの交流会は、花形さんも司書さんから中学校の子どもたちの様子をいろいろお聞きになり、司書さんも直接花形さんからお話をうかがって、とても充実した楽しい時間でした。

次の日は、中学校1年生のオーサー・ビジット5クラスが終わったあと、大阪府立国際児童文学館に来ていただきました。児童文学館にお越しになっていかがでしたか。

花形

はじめて訪問したのですけれど、とても感激しました。書庫を案内していただいて、宝物のようにすばらしい昔の絵本や、子どもの時の愛読書だった『少年少女世界文学全集』[6]を見せていただきました。全集を開いた瞬間に小さかった頃の自分がよみがえってきて、涙が出そうになりました。

そのあと、中学の時に友だちと回し読みして愛読していた『セブンティーン』[7]も見せていただきました。今の『セブンティーン』はファッションや男女交際の内容が中心ですが、当時の『セブンティーン』はマンガが多くて、水野英子の「ファイアー」とか、津雲むつみの「おれは男だ！」とか、懐かしいマンガがいっぱい載っていました。私はその当時『セブンティーン』に載っていた飛鳥幸子さんのマンガが好きだったのですが、児童文学館の方がコミックの単行本を探してくださいました。

土居

ご覧いただいたのは、飛鳥幸子さんの『怪盗こうもり男爵』[8]でしたね。

花形

飛鳥さんは、寡作なマンガ家です。それで、もう一生、この人の本を手に取ることはないだろうと思っていたのですが、あったのですね。興奮してしまって、そのまま読みはじめて、閉館時間が過ぎても外が暗くなっても読みふけっていました。帰りのバスや新幹線のなかでも、児童文学館に行けば自分の好きだった本や雑誌やマンガに会えるのだと思うと何だか心が温かくなりました。児童文学館がなくなったら、とても悲しいです。ぜったい、残してほしいと思います。

土居

ありがとうございます。『怪盗こうもり男爵』はどんなお話ですか。

花形

アイザック・アシモフというロシアの亡命貴族がロンドンで大学教授となり、美しい女性といっしょにいろいろな事件を解決していくという話です。

私は、飛鳥さんのマンガの絵柄を真似してマンガを描いたことがあります。ページをめくっていくと、「アッ、ここ写した」と覚えていて、なつかしいやらうれしいやら。昔、マンガ少女だった方は、この気持ちをわかってくださると思います。

土居

大学教授が「怪盗こうもり男爵」に変身するのですよね。ヒーローものですが、影のある感じですね。

花形

お読みになりましたか。

土居

読みました。おもしろかったです。竹宮恵子さんが、解説を書いていらっしゃいますね。

２．子ども時代について

（１）好きだった本・マンガ・児童文学作品

土居

少し子ども時代についてお聞きしたいと思います。先ほど児童文学館で『少年少女世界文学全集』と再会されたとおっしゃいました。

花形

『少年少女世界文学全集』は、私の作家としての原点です。イギリス編の「アーサー王物語」やフランス編の「ローランの歌」などを子ども向けに翻訳していて、他にも、東洋編の「聊斎志異」「三国志」「西遊記」「雨月物語」「古事記」、古代中世編の「ギリシア神話」「エジプト神話」、ドイツ編の「くるみ割り人形」などなど。とにかく、児童文学の名作から大人の文学と思われるものまで入っていて、時間を忘れて読みまくりました。年を経ると現実の方にひかれてしまって、前ほど本を読まなくなったので、あの時期に『少年少女世界文学全集』にめぐりあったのは、私にとって幸運でした。

土居

この全集のほかに、好きだった本、児童文学作品はありますか。

花形

歴史ものが好きでした。児童文学作品はそれほど読んでいませんが、「ドリトル先生」シリーズ[9]、ケストナーの作品、「やかまし村」のシリーズ[10]、『メアリー・ポピンズ』[11]などは好きでした。

土居

『セブンティーン』以外で、好きだったマンガはありますか。

花形

マンガはかなり読みましたので、話し始めると止まらなくなってしまいます。ですので、少しだけお話ししますと、母親にうそをついてお金をもらって『少年マガジン』[12]の創刊号を買った、という思い出があります。少年マンガが好きだったのですね。昔の作品でしたら、ちばてつやの「紫電改の鷹」とか。もちろん「巨人の星」も「明日のジョー」も好きでしたし、手塚治虫も好きで、「火の鳥」などにも夢中になりました。

土居

テレビアニメーションもご覧になりましたか。

花形

子ども時代がテレビの草創期だったので、「鉄腕アトム」「エイトマン」……ほとんど見ていると思います。「エイトマン」の歌、今でも歌えますよ。アニメじゃないけど「赤胴鈴之助」「七色仮面」「ナショナルキッド」……、それから「ウルトラＱ」も見てました。なんだか、化石のような人間ですね。

（２）子ども時代の言葉や読書に関する記憶

土居

児童文学を書く人は自分の子ども時代をよく覚えていると言われますが、一番最初の記憶はどこまで遡れますか。

花形

1 歳か 2 歳かよくわからないのですが、会社に行く父親を母親にだっこされて見送ったこと。山の上に住んでいたのですが、春、一面にスイセンが咲いている坂を父親が下って行く風景を何となく覚えています。三島由紀夫は、産湯につかっているのを覚えていると言っていますが、私は普通の人間なので、そんな感じです。

土居

はじめてご自分で本を読んだ記憶はありますか。

花形

読んだ記憶、というのは定かではないのですが、いとこのお兄さんのマンガを見たのが、マンガというものに接した最初の記憶です。3 歳か 4 歳ぐらいで、まだ字が読めなかったので作品はわからないのですが、覚えている絵からすると手塚治虫じゃなかったかなと思います。

絵本の記憶で鮮明なのは、『カナリヤ姫』[13]です。知り合いのお宅に遊びに行ったときにいっぱい絵本をいただいた、その中の 1 冊でした。ストーリーは忘れてしまいましたが、泰西名画のように美しいお姫様とカナリヤの絵は覚えています。どうも私はビジュアル人間らしくて、映像で覚えてしまうのですね。

（３）子どもの頃を振り返って

土居

花形さんは、どんなお子さんでしたか。

花形

引っ込み思案で、あまり自信がなくて。ただ、絵がうまいと言われていたので、それがアイデンティティーだったような。自分を出すようになったのは、中学生ぐらいからだと思いますが、それまではおとなしい子どもでした。

土居

ずっと横須賀でお住まいでしたか。

花形

ずっと横須賀です。横須賀の軍港を見下ろす山の上に家があったので、日常的に軍港を見ていました。正面がアメリカ海軍のベースで、左側が自衛隊の軍港で、そこにある船は全部軍艦なのです。子どもの頃の私は、船というのは軍艦のことだと思っていました。当時、アメリカはベトナム戦争のただなかにあったので、ベースに戻ってきた船は、それは戦争をしてきた船だったわけです。私は、すごくボーッとした子どもだったのですが、日本は平和だけれども世界のどこかでは戦争をしているのだという認識は、小学生くらいからあったような気がします。

このことは、私の意識のなかで、すごく重要な部分だと思うのです。作家になって、リアルなものにひかれてしまう、書く時に常にリアルなものを求めて、書いている最中も「それは嘘じゃないか？」という声がどこかから聞こえてくるというのは、子どもの時に毎日軍艦を見ていたからではないかということに、最近、気がつきました。

土居

高校の時は、美術部でしたか。

花形

美術部でした。

土居

中学の時は。

花形

中学も美術部です。

土居

美術がお好きだったのですね。

花形

そうです。なりたいもののベスト１はマンガ家、ベスト２は画家でした。

昔はオタクという名称がなかったのですが、オタクだったのだと思います。でも、昔はそこらじゅうに遊ぶ環境があったので、友だちといっしょにいろんな遊びもしました。普通に遊びながら、本を読みマンガも読んでいたわけです。

そういえば、小学生の頃は、「勝ってうれしいはないちもんめ」とか「あわぶくたった」とか、歌いながら遊んでいました。あとは、なわとびやゴムとびや石けり……とか。本当に昔の子どもですね。

３．作家になるまで

（１）「遊び塾」の思い出

土居

「遊び」ということでいうと、大学を卒業されてから「遊び塾」をされていますね。

花形

小学１年生から３年生までを対象にして、土曜日の正午から日没まで、海や山や川や公園に行って遊ぶという塾です。夫と私と、あとスタッフとして大学生にてつだってもらいました。

子どもたちの親御さんは団塊の世代でした。自分たちも子どもの時にいっぱい遊んでいた世代ですね。だから、遊びに切り傷や擦り傷は当たり前、という人たちで、我が子がドロドロに汚れて帰ってきても、それが普通だと受け止めてくれました。遊びは大切だと、全面的にバックアップしてくださっていましたね。

今にして思うと、「危なかったなあ」というようなことをいっぱいやっていました。今やったら大問題になると思います。

たとえば、よく遊びに行っていた山なのですが、たまには違う登り方をしてみようという話になりまして。で、いつもの登山道を登るコースは「花の子ルンルンコース」、地図を見ながらヤブをかき分けて登るコースは「死ぬかもしれないコース」というふうに、2 つのコースに分けて、子どもたちに選ばせたわけです。そうすると「死ぬかもしれないコース」に、バーッと男の子たちが集まってくる。みんな、そういう冒険が好きなんですよね。そこでスタッフは、途中の要所要所で、子どもたちが登って来るのを待っていたわけです。けれども、いつまでたっても来ないのです。

よく考えてみたら、って、考えなくてもわかりそうなものですが、「低学年の子どもは地図なんて読めないじゃない」ということに気がつき、「これは大変だ」「どこかで遭難しているかも」と慌てて探しに行きました。すると、子どもたちは地図なんか無視して、垂直登攀していたのです。前方にどんな障害物があろうと、とにかくまっすぐ登ってくるのです。スタッフ一同、あれには感動しました。もしかしたら、この子たちは本当に死なないのかもしれない、なんて……。

ほかには、台風のあくる日に、海に遊びに行ったり。台風の翌日って、おもしろいんですよ、すごいビッグウエーブが来るし、波打ち際にはいろんなものが打ち上げられているし。でも、そんなときに海なんて行って、波にさらわれでもしたら大変ですよね。普通は行きませんって。ただ、当時の子どもたちには危機管理能力がありましたから、そういう子どもたちに助けられてワイルドな活動を続けられたのだと思います。

本当はやってはいけないことですが、個人的には、夜、海岸で中学生と花火で戦争ごっこしたこともあります。20 年以上前のことですけど、こうなると、ただの危ないヤツですね。反省してます。

でも、アバウトでいい時代でした。よくあんなことができたなぁーと、今思うと夢のようです。たぐいまれな体験をさせていただいて、なおかつそれが自分の血肉になり作品になっているわけで、あのころの子どもたち、お母さんたち、お父さんたちに感謝、です。

（２）「遊び塾」と作品のかかわり

土居

何年ぐらい遊び塾をされていらしたのですか。

花形

10 年ぐらいですか。私は子どもが生まれて、8 年で引退しましたが。

土居

けっこう長い間ですね。花火といえば、今回のオーサー・ビジットで取り上げた「アート少女」（『Fragile』所収）でも、バリケード封鎖した時に、打ち上げ花火を何連発も発射して「自分たちの部室を取らないで」とアピールするために使います。これもその時の体験がもとになっていたのですね。

花形

そうです。ドラゴン花火の連発、実際にやってましたね。それから、ロケット花火を傾斜のある発射台に 20 本ぐらいバーッと並べて、端から火をつけていくと、すごい勢いでバババッと飛んでいきます。確かその体験は、『ゴジラの出そうな夕焼けだった』[14]でも使いました。危ないので、みなさん、なさらないように。って、普通、中学生とそんなことしないですよね、いい大人が。アルミホイルやサランラップの筒で銃身を作って、ロケット花火を仕込んでバズーカ砲みたいに撃ったりして、ただのバカですね。ここだけの話にしてください。

土居

ほかに「遊び塾」の時の子どもの様子などが、作品に反映されていますか。たとえば、個性的な子がいて、それが作品のなかで少しアレンジされてあらわれているということはありますか。

花形

初期の『ゴジラの出そうな夕焼けだった』『逃げろ！ウルトラマン』[15]『半魚人あらわる』[16]では、いっしょに遊んだ子どもたちがイメージとして反映されています。だから、ちょっと過激だったかもしれません。大人に向けた小説ですが、児童文学ということだったら出版は無理だったでしょうね。

土居

一連の作品は、ちょっと頭が良くて、いつもニヒルな感じの男の子シュンが主人公（語りて）になっています。シュンが、お父さんが出て行ってから、お母さんとすごく優秀なお兄さんとの間で、自分の居場所をさがしながら、町の悪ガキたちとつるんでいるというお話しです。『ゴジラの出そうな夕焼けだった』の時は、お母さんに夏の合宿に無理やり入れられて、ちょっとお姉さんの女の子たちにちょっかいを出したり、一緒に合宿に入れられたエリート校の男の子たちとケンカをしたりというようなエピソードがいろいろ出てきます。そこに子どもたちの赤裸々な、時には差別的とも言えるような過激な言葉がでてきたり、性的なこととかが出てきたりします。けれども、実際自分の子ども時代を振り返ってみると、実はこれ以上に子どもたちは過激だったなと思います。リアルという意味では、子どもたちがそれぞれの作品のなかで一筋縄では行かず、図太さと繊細さを持って描かれていて、とてもおもしろいです。『一瞬の原っぱ』[17]までがシュンの視点で、最後の『永遠のトララ』[18]だけが、女の子の視点で書かれています。書店では手に入りませんが、図書館にはありますので、お読みいただくことができます。

４．執筆活動について

（１）作家になったきっかけ

土居

「遊び塾」をしていらっしゃるなかで、作品を書いてみたいなと思われたのですか。

花形

前にも言ったように、私はマンガ家か画家になりたかった人間でした。趣味で、ボタニカル・アートのような繊細な絵を描いていましたが、小説を書きたいという意識はありませんでした。

子どもができまして、さすがに「遊び塾」はもうできない。平行してやっていた学習塾の講師もしばらく休まなくてはならない。という状況になって、「何かしなくちゃ。このままだと社会と切れてしまう」という思いにとらわれました。では、何をしようかと考えた時に、アートの方は自分でもプロになるほどの才能はないとわかっていましたし、だいたい絵を描くには道具をいっぱい使うから育児をしながらは無理だろう、と。それで、ペンと紙だけあればできる作家はどうだろう、と。「遊び塾」でいろんな体験をしていたので、ネタはあるのです。ただ、書き方がわからない。妊娠したころから1年間、どうやって書くのか、一人でずっと模索していました。

1年経ったある日、なぜか最初の1行が書けまして、そうして完成したのが『逃げろウルトラマン』でした。それを河出書房新社の文藝賞に応募しました。なぜ文藝賞かといえば、300 枚書いてしまったので、その枚数ではほかに受け付けてくれる賞がなかったのです。

ぜったい質問されると思うので、先にお話ししますが、応募するときに「ペンネームをどうしよう」と考えました。子どもを育てている時は、なにかテンションがおかしくなっているのでしょうか。突然頭に浮かんだのが「巨人の星」の花形満でした。あのマンガに出てくるのは、パロディーになるくらい濃～いキャラクターばかりですが、なかで一番普通なのが花形満だったので、私は花形のファンだったのです。

あの時は、本気で作家になれると思っていなかった、というか、自分が書いた小説がどの程度のものかもわからず「せっかく書いたんだから応募してみよう」という感じでした。そんなわけで、軽い気持ちで「花形みつる」と書いて出してしまったのでしょう。

ところが、最終選考に残っているじゃありませんか。ペンネームが「花形みつる」だったのでアセッていたら、最終選考で落ちて、内心ホッとしました。実際、育児と家事で忙しくて、小説どころじゃないという状態でしたし。そうしたら、河出書房新社の編集長が家にいらして、「おもしろいから、次の作品を書いてみて」と言われ、びっくりしました。本当に世の中なにがどうなるかわからないものです。

で、次に書いたのが、『ゴジラの出そうな夕焼けだった』です。

ただ、いくらなんでもこのペンネームは……。担当の編集者に「ペンネーム変えたいのですけれど」と言いましたら、「ああ、そうですか。では、左門豊作[19]にしますか」と言われたので、「だめだこりゃ」と思って、「じゃあ、いいです、花形みつるで」と……。

今でも時々、恥ずかしいですよ。宅急便の配達の方に、「こちらに、花形みつるさんがいらっしゃるのですか。」と聞かれますし。一度で名前を覚えてくれるので、その点はいいかもしれないけど。それにしても、いったい私は何を考えていたのでしょうね。

土居

デビュー作の『ゴジラの出そうな夕焼けだった』は、1990 年の「文藝」文藝賞特別号に掲載されて、最終的に出版されたのですね。

花形

そうです。

土居

それが最初の本で、そのあとしばらくは、同じ主人公でシリーズを書いてこられたのですね。

花形

そうです。大人向けの作品を書いていました。

（２）子ども向け作品の執筆

土居

子ども向けに最初に書いたのは、どの作品ですか。

花形

『ドラゴンといっしょ』[20]です。河出書房新社が児童文学のシリーズを出すことになって、書いてみてと言われました。子ども向けの作品の書き方がよくわからなかった私に、編集者がくれたアドバイスは、「子どもが読めない漢字は使わない」「熟語を使わない」「情景描写は短く」の三点でした。

そうしたら、『ドラゴンといっしょ』が野間児童文芸新人賞を取り、その次に出した『サイテーなあいつ』[21]が新美南吉児童文学賞、その次の『ぎりぎりトライアングル』[22]で日本児童文学者協会賞等をいただいたりして、児童文学の作家というイメージになってしまいました。本人としては、書こうと思えば、大人向きも書けるのですよという気持ちはありますが、児童文学に足を踏み入れたことは良かったと思っています。

土居

この『ドラゴンといっしょ』という作品は、半年前にお母さんが交通事故で亡くなった、有名私立中学校 1 年生の男の子が主人公です。小学校 1 年生の弟がいて、家政婦さんが面倒をみてくれている

はずだったのに、その人は早く帰ってしまい、ひとりぼっちでいる時のほうがずっと多いという境遇です。

ある日、主人公が家に帰ってくると、弟が「おにいちゃん、ポチのシッポ、踏んでるよ」と言うのですね。ポチというのは、弟にだけ見えるドラゴンの名前なのです。主人公はこれはヤバいと思って、初めて弟をちゃんと見て、まともに話しをするようになります。お母さんが生きていた時には、お母さんは弟のほうをかわいがるから、弟に嫉妬していたところもありましたが、弟と向き合って家族のなかでドラゴンを受け入れていくまでが描かれているという意味では、子どもの内面を書いていらっしゃいますね。

花形

この作品は、「リアルじゃなきゃいけない」という枷があった私としては、初めてのファンタジーなのです。とてもそうは見えないでしょうけれども、私のなかではギリギリ、ファンタジーになっています。

土居

最後にお兄さんがポチを見るところがいいなと思います。

花形

そこが、ファンタジーの部分です。

以前の私だったら、そういうふうには書かなかったと思います。ですが、初めて児童文学を書くことになり、「ドラゴンが見えてもいいんじゃないか。人間の心は、もっと深いものなのだから」と考え、「リアルじゃなきゃいけないという枷をはずして、もっと広い世界で書いてみよう」と。ドラゴンが見えることもあるのだと納得するまでにはずいぶん時間がかかりましたが、そういう意味で児童文学を書いて良かったと思っています。自分がちょっと自由になったなと感じました。

土居

『サイテーなあいつ』は、＜キ＞と＜シ＞の発音が＜チ＞になってしまって、「スキ」を「スチ」と言ってしまうソメヤくんと強い女の子カオルちゃんの友情の物語です。ソメヤくんは、クラス中からサイテーと思われているのですが、カオルちゃんは彼のことをなんとなく面倒をみるようになります。カオルちゃんはすごく強い子で、クラスの子から「ソメヤとラブラブ～」とからかわれて、バスケットボールのチーム分けの時に仲間はずれにされても、「あたしとソメヤくんで、チームつくります」と言って、二人だけのチームを作ります。カオルちゃんは、シュートをして得点を取ってから、ソメヤくんに相手チームの女の子を追いかけるように指示します。彼が近寄っていくと、女の子が逃げ回るので、2 点差で逃げ切ります。中途半端に子どものいじめを書くのではなくて、子どもたちが時には残酷なことをするというのをしっかり書いているところが、とてもおもしろく読ませていただきました。モデルはいるのですか。

花形

それまでに付き合っていた子どもたちから影響は受けていますが、特定のモデルはいません。

この作品は新美南吉児童文学賞をいただきましたが、内容的にケンカの場面が多いのです。で、ある会合によばれた時に、「なぜ暴力場面を書くのだ」と言われたことがありました。私は、普段は常識のあるおだやかな人間です。が、ケンカを売られるとつい買ってしまいます。その時もブチッとキレまして、「お前は子どもの時にケンカをしたことがないのか」と言いそうになりました。まぁ、さすがに自制して、「ケンカと暴力とは違う。ケンカは子どものコミュニケーションなのだ。ケンカと暴力の違いがわからないのなら、『少年ジャンプ』を読め。『少年ジャンプ』も読んでいないのか」と反論したのですが……、これって反論でもなんでもないですね。ほとんど子どものケンカです。私にケンカを売ると、だいたいこんなふうに「お前のかあさんデベソ」みたいなバカバカしい展開になるわけで

す。

それはともかく、子どもにとってのケンカはコミュニケーション、という考えはかわりません。

土居

次の作品の『ぎりぎりトライアングル』は、表紙にすごく身体の大きい女の子ふたりと背の小さい気の弱い女の子が描かれています。小さなノリコは、転校してきてずっと友だちがいなくて、お嬢様系のサヤカちゃんの下っ端になっていたのですが、クラス替えでまたひとりぼっちになります。その時に、大きなシノちゃんとアリサがからんできて、ケンカしたりしながら友だちになるというお話です。アリサは、お母さんがフィリピンの出身だということで、からかわれたりしていますね。

花形

そうですね。横須賀はベースがあるという土地柄、昔からアメリカ人がたくさん住んでいました。私も、子ども時代、混血の子たちと遊んでいましたし。アメリカ人といっても、昔は白人が多かったのですが、今は、アフリカ系アメリカンとフィリピン系の方が多いですね。だから、フィリピンと日本の混血というのは、私にとっては特別な設定ではありません。また、作品に書かれているようにシノちゃんとアリサのコミュニケーションの仕方はいっけん荒っぽいけれども、ふたりにもまれてノリコは自信を持つようになります。ただ荒々しいだけじゃなく、その中にやさしさがあるからです。

作品のなかのお祭りの場面は、近所の町内会のお祭りの様子が反映されています。娘が小学生だった頃は地域の結びつきが強かったので、お祭りでは町内の人たちが出店をやっていました。「あそこのおばさんが、やきそば作っている」とか「こっちのおじさんが、金魚つりやっている」というように。

土居

花形さんの作品のなかには、そういう地域性が出ていますね。最初の『ゴジラの出そうな夕焼けだった』のシリーズも、他の作品の中にも、おじいさんが登場したりします。地域というものを大事にされているのですか。

花形

そうですね。ちなみに、あのおじいさんは、私の父親がモデルです。

土居

そうなのですか。

花形

はい。あの「酋長」という、ちょっとあぶないおじいさんです。

父は今 86 歳で、心臓が悪くてあまり元気ではないのですが、昔は、イーグルスという草野球チームの監督をやっていました。その関係で、私の住んでいた町内の少年野球のチームから、「コーチをしてもらえないか」と頼まれたことがあります。これが、それまで一度も勝ったことがないという弱いチームだったのですが、父親の「お前らが見ているのはピッチャーで、ボールを見ていない。ボールをちゃんと見て、手元に来たところを当てればいいんだ」というアドバイスだけで、試合に勝っちゃったんですよね。「すごいな」と思いました。といっても、一度勝っただけで子どもたちがいきなり天狗になってしまい、次の試合はアッサリ負けちゃったんですけど。

その父の、頑固でヒトの言うことは全然聞かなくて、超マイペースで、畑仕事が趣味で大型犬を飼っていたことなど、酋長の造形に使わせてもらいました。

土居

そのあと、中学生を主人公にした作品群をお書きになっていらっしゃいますが、お子さんの成長とかかわっているところがあるのでしょうか。

花形

そうかもしれないですね。

土居

『フルメタル・ビューティ！』[23]『荒野のマーくん』[24]『アート少女』、『Lost and Found-さがしもの』[25]の「いっちゃん」もそうですね。

花形

はい。

（3）文体

土居

作品のなかで、カタカナ表記をする時は、どのような意識で使われているのですか。

花形

子どもの会話を表現する時に、カタカナを使うとリアルな感じが増すので使っていました。最近はそんなに「リアル」にこだわらなくなったので、カタカナも減ってきたような気がします。

土居

実際に子ども同士が話している言葉を聞いてみると、何を言っているのかわからないような言葉をたくさん使っています。実際の会話のリアル感と読者が読む時に感じるリアル感について、もう少しうかがえますか。

花形

ニュアンスと意味との兼ね合いを斟酌する、ってことでしょうか。子どもがしゃべっているままを書けば全てリアル、ってものではないですものね。

（4）キャラクター

土居

キャラクターがすごくおもしろいですね。よくアウトサイダーのような子どもが出てきますが、意識してこういう主人公を書きたいなと思っていらっしゃいますか。

花形

私は王道がにがてなのです。はずれた人間が好きなのです。はずれ気味の人間に愛着や愛しさを感じます。

土居

主人公の性別でいうと、最初の大人向きの「ゴジラ」のシリーズは、最後の作品以外は男の子が主人公でしたが、最近の『フルメタル・ビューティ！』『アート少女』は中学生や高校生の女の子が主人公になっています。性別による違いというのはありますか。

花形

男と女、基本的にどちらも書き始めれば問題ないのですけれども、ただ、私は女で、男の身体のメカニズムがよくわからないので、少年から大人になりかけている男の子を書く時はちょっと悩みます。

土居

「男の子っぽい女の子」や「女の子っぽい男の子」を書かれることが多いですが、意識して書いていらっしゃいますか。

花形

そういう子が好きなのでしょうね。また、自分で自分の道を切りひらく子やめげない子、あきらめない子も好きなもので、ついそういう感じの主人公になってしまいます。

依頼されて「落窪物語」の意訳をしたことがあるのですが、主人公の落窪の君と呼ばれているお姫様は、とても心優しく美しい方だけど、運命に流されてばかりで、どうしても感情移入ができません

でした。結局、自分の道は自分で切りひらく、阿漕という元気な侍女を主人公にして書きました。「誰かに助けてもらう」という人がだめなんです。待っていれば王子様が助けに来てくれるというのが女の子の願望、っていうのはわかるのですが、「王子様なんて、この世の中にはいない。あんたが自分で自分の道を切りひらいて、王子様を助けてやるぐらいのお姫様になれば」と思ってしまいます。なんてエラソーに言っているわりには、自分はあまりしっかりしていないのですが。

（５）作品の執筆

土居

作品は、どういう時に思いつかれますか。一度に 3 つ、4 つの作品を平行してお書きになるタイプですか。

花形

あまり器用ではないので、これまではひとつだけに集中して書いてきましたが、最近は娘が大きくなって時間ができたせいか、平行してふたつぐらいは書けるようになりました。

土居

次はこういう作品を書こうというのは、どんなふうに思いつかれますか。

花形

「こんなのはどうでしょう」と編集者の方が企画を持ってこられる場合もあります。あとは、これまで生きてきたなかでおもしろい体験をいっぱいしてきているので、そこから思いつくことも。

土居

メモや構想ノートがあって、それをもとに書き始めるということもありますか。

花形

そういうこともありますね。「これはおもしろい。傑作かも」と書きはじめるうちにカン違いだった、ということに気がついて、最初だけ書いてそのままというものが山のようにありますが。

土居

そうなのですね。

花形

はい。30 代半ばまで普通の方がなさらないようなばかばかしい体験をいろいろしていたので、ネタはいっぱいあるのですが、思いついたものを作品にするまでには、やはり醸造させる時間が必要ですね。

土居

はじめから結末を決めて書かれるタイプですか。それとも、登場人物たちがどんどん自分たちで物語を作っていくという感じなのでしょうか。

花形

一応結末は決まっていますけれども、書くうちにぜったい横道にそれるのです。別にそんなこと書かなくても本題には関係ないということを書きたくて仕方がないのです。昔からの癖ですね。最初のころは、作家意識も低くて、よくわからないで書いていたので、どうしても書きたいエピソードがあると、全然本編に関係ないのに、それが書きたいがためにストーリーを変えたりして。さすがにその時は編集者に怒られました。今でもその癖があって、書いているうちにそれてくるのを修正するのがけっこう大変です。

土居

けっこう書き直しされますか。

花形

しますね。

土居

登場人物に入れ込むと、ついその人の生活のこういうものを書いてみたくなるという感じですか。

花形

ええ、書かなくてもいい細部を書いてしまうので、かえってわずらわしくなってしまうという感じです。

土居

そういうのがあるからこそおもしろいということもあると思います。登場人物のイメージがしっかり書き込まれているから、リアル感が深まるのでしょうね。

花形

そうなんですけどね。でも、普通は、頭にあるイメージ全ては書かないでしょう。私は抑えがたくて書いてしまい、それであとになって「あー、またやってしまった」となって、削るという余計なことをしています。なので、書くのが遅くなる。わかっているけど、やめられない。

土居

ポプラ社、河出書房新社、講談社、偕成社と、いろんな編集者の方と一緒に作品を作ってこられましたが、編集者の方とのやりとりのなかで、作品のテーマや内容が変わってくることはありますか。

花形

児童文学を書き始めてからは、作品は編集者の方との共同作業だということがわかりました。以前は野放しというか、自分の書きたいように好きかってに書いていたのですが、児童文学に行ったら、みなさん丁寧にフォローしてくださるのが新鮮でした。

土居

実は、今日編集者の方が来てくださっているのですね。

花形

そうなのです。

土居

偕成社の別府さん、もしよかったら編集者からごらんになった花形さんの作品についてお話いただけますか。

別府

こんにちは。『荒野のマーくん』を担当いたしました別府と申します。

小説というのは、嘘八百で読者を虚構の世界に引っ張り込んでその果てに真実を見せるという、一種詐欺のような芸術です。花形さんは一見普通のおばさまに見えるけれど、実はこの詐欺師の素養がおありになるのだと思います。花形さんの小説もまた、ありそうな設定から始まるんですけれども、だんだんボルテージアップ、後半はとんでもないことになって、主人公も読者も大泣きしてしまうような結末を迎えます。そこにはクールにしれっとしているけれど、実は人一倍責任感が強い、かくれ根性の持ち主たちの奮闘があります。お金も食べるものもなくなっても、パパを守る『荒野のマーくん』をはじめ、『ゴジラのでそうな夕焼けだった』も『ドランゴンといっしょ』も『アート少女』も、「この主人公たちがいるあいだはまだ世の中捨てたもんじゃない」って、本当は虚構なのに現実と区別がつかなくなって主人公の奮闘に感動してしまうのです。花形さんの凄さだと思います。花形さんの作品はどれも疾走しているような躍動感がありますし、文体もすごくリズミカルですが、

書く時には、実はうんうんうなって毎日少しずつお書きになっておられるそうです。リズム感あふれる文章だからといってリズムに乗って早く書けるわけではないんですね。だいたい作品をお願いしてから、1年ぐらいはかかるでしょうか。

土居

そうなのですか。

花形

本当にすみません。

別府

いえいえ。でも、できあがった作品はそんなわけで、いつまでも子どもたちに支持されているので、私たちは気長にお待ちしています。

（6）質問

土居

ありがとうございました。急にお願いしてすみません。

せっかくの機会ですので、会場からのご質問やご意見をおうかがいしたいと思います。花形さんにこんなことを聞いてみたいなとか、実際に子どもたちが花形さんの作品をこんなふうに読んでいますよとか、どんなことでもけっこうですので、挙手をお願いいたします。

発言者１

羽曳野市で学校司書をしております。羽曳野市にも、小学校14校中13校に司書が入っています。私の学校では、花形みつるさんの本が入ってなかったのですが、中学校の学校司書の方から生徒にとても人気があるということをお聞きして、小学生向けの本を何冊か図書館で借りて、子どもたちに薦めてみました。そしたら、『ぎりぎりトライアングル』を読んだ6年生が、「先生、これ良かったよ」と言ってきてくれたので、これからいっぱい入れていきたいと思っています。花形さんの本は、スピード感がある文章で、すごく読みやすいです。

花形

どうもありがとうございます。

発言者２

河内長野市立図書館で司書をしております。先生が女性の作家さんだということを今日初めて知りました。男の子に「おもしろい本ない？」って聞かれて、『荒野のマーくん』を薦めたら、「すごくおもしろかった」と言っていました。

花形

ありがとうございます。

発言者２

その子はすごく個性的な子なのですが、「ぼく、そんなに変な子じゃない」と言うのです。今の子どもたちは、自分はフツーだという感覚をすごく持っているみたいです。先ほどオーサー・ビジットの時に子どもたちの個性を感じたとおっしゃっていましたが、個性についてもう少しお話ししていただけたらうれしいです。

花形

「遊び塾」の時のことですが、しょっちゅう友だちとトラブルをおこしては取っ組み合いになる小学生男子がいました。そのときも、1対6くらいのガチのケンカで、私だけでは止まらなくて、男性のスタッフがいっしょに止めに入ったくらいです。なにしろ相手は複数ですから、あちこちケガをしていて、私はその子に薬をつけながら「大丈夫？痛いでしょ」と言ったんです。すると、いきなり「う

るせー、ばばあ」って言われて。そのときは、私もさすがに頭にきて、「そういうふうだから嫌われるんだろ」と思ったのですが、それから2、3日「なんで、あの子はあんなこと言うんだろう」とずっと考えて、やっと気がつきました、あの子はプライドが高いのだと。私の「かわいそう」という感情が伝わって、プライドを傷つけてしまったのですね。

子どもの個性って、ふだん見ているだけでは本当のところはよくわからない。相手の傷口に手を突っ込んでしまって、それが自分にはね返ってきたときにわかるのですね。その子は、ただ単に乱暴でコミュニケーションがうまくないというだけではなくて、すごくプライドが高いのだ。だから、ちょっと何か言われただけで、自分の全人格を傷つけられたみたいになって怒るのだと、そのときわかったのです。本当に子どもを知りたいと思ったら、自分自身もそれなりに傷つかないとわからない。

土居

先ほどのオーサー・ビジットの時のお話しに戻ると、登場人物へのメッセージを発表する時の立ち上がり方とか、花形さんへの話し方とか、照れ方とか、握手の仕方とか、そういうところに子どもたちの個性が何となく見えてきましたね。

花形

そうですね。第1日の中学3年生のクラスでは、教室に入ったとたんに引きつけられてしまった子がいたのです。身体が大きくて、坊主頭で、むすっとしているのですが、とても気になる存在でした。ワークシートを書いている時に見に行ったら、青木君に対して「教室に行こう！」って書いていたのです。「ああ、こんなことを書いてくれるんだ」とうれしくて、どうしてもその子の意見が聞きたかったのですね。

土居

そしたら、担任の先生があててくださったのですよね。

花形

発言し出したら、すごいガタイに似合わず照れまくって。

土居

照れていましたね。

花形

少し言葉をかけても、シャイな子なのだというのが伝わってきました。

土居

最後に握手をしましたね。

花形

握手の時もすごく照れていましたね。やっぱり、相手をわかるためには、見ているだけではなく、声をかけてみることから始めて。で、本当にわかるためにはこっちもちょっと傷つかないとだめかなと思います。

土居

その子は、野球留学で遠くの学校へ行くことが決まっていました。中学3年生は、それぞれがこれからの進路と向き合っているので、1年生とは違う特別な雰囲気を持っていましたね。

花形

そうですね。

土居

どこか落ち着いているといいますか。

花形

前日が私立高校の入試だった、なんて時に伺っちゃっていいのかな、と心配でした。きっと、みんな心のなかでは不安とか動揺とかあったろうに、よくわからないおばさんがやって来てしゃべっていることをちゃんと聞いてくれて、大人だなーと感心しました。

土居

他に何かご質問ありますか。

発言者３

豊中市の小学校で司書をしております。うちの学校では、最近出ているヤングアダルト『Lost and Found－さがしもの』とか『Fragile―こわれもの』はよく貸し出されます。『ラブ＆ランキング！』[26]もすごく人気です。

『わがままガールズ』は、幼年童話として読みやすくて人気なのですけれども、『ぎりぎりトライアングル』のほうは表紙に抵抗があるのか、もうひとつです。低学年の子どもたちが読める幼年童話が少ないので、読みやすくておもしろい幼年童話をどんどん書いていただきたいと思います。

『荒野のマーくん』も人気があります。男の子が楽しめる本が少ないのですが、『荒野のマーくん』を５年生に紹介したところ、マーくん応援団みたいなのができて、「マーくんがんばれー」と男の子が声をかけてくれるんです。そのあと『荒野のマーくん　その受難』に、すごくいっぱいリクエストがあったものですから、よその学校から借りました。高学年の男の子が出てくるおもしろい本もどんどん書いてほしいなと思っています。

土居

『荒野のマーくん』は、小学校６年生のマーくんが主人公で、ママはすごくしっかり者なのですけど、パパは全然だめなパパで、すごく頼りないのです。ある時、ひとりの美少女がやってきて、「この人は私のお父さん」と言って、去っていきます。パパがそれについてちゃんとママに説明しないものだから、ママは家出をしてしまいます。それから、パパとマーくんとのふたり暮らしになるのですね。パパは、仕事もやめてしまって、パンの耳しか食べるものがないというような生活になります。そのなかで、マーくんが成長していくのですが、突如現れたあの女の子の正体は何なのかいうことを自分で突きとめていって、その女の子とも友だちになるというようなお話です。

花形

『荒野のマーくん』を書いたきっかけは、実はマーくんのパパでした。マーくんのパパみたいな人は実際にどんどん出てきていると思うのです。いつまでも子どもで、いい歳をして毎週「ドラゴンボール」[27]を読んでいて、「ドラゴンボール」が終わった時は泣いたというような男性。家庭は持っているけど、大人としての自覚がない。それなのに父親になってしまって、という。そういうパパが書きたかったわけなのです。

パパはすごく頼りないけどいい人です。でも、いい人だからといって、親としてそれでいいわけではないですよね。それをマーくんは、批判しないでかばう。かばって、まるごとパパとして受け入れる。そういうふうな子どもと大人の関係があるのではないかと考えたのをきっかけに、作品を書きました。

昔は、親といえば、頼もしい偉大な父親とか大きな愛で包んでくれる母親とか、または娘や息子の行くてをさえぎる頑迷な親とかが出てきたのですけれども、今、政治からなにからみんなこんなに迷って先が見えなくなっている時代に、親にしっかりしろと求めても無理なのじゃないか。親がくよくよ悩んで、子どもに対して自分の弱さをみせながら、子どもと付き合っていくほうが、もしかしたらうまくいくのじゃないかと思います。そういう意味で、「強い子ども」を書きたいという思いもあります。

土居

マーくんは、けなげですよね。

花形

そう、けなげですよね。

土居

『荒野のマーくん』を読んだ時は、すごくそう思いました。ここまで我慢できるかなと思います。だめなパパは、「こんなパパ、いるいる」みたいな感じでとても楽しいです。

花形

私は、あのパパ、けっこう好きなんです。高圧的で支配的な親よりは、ずっといいでしょ。すごく困る人ではありますけど。もし私に財力があったら、ああいう男と結婚してもいいかも。

（7）思春期の子どもに書く

土居

今日は「10 代の子どもの読書を考える」というテーマですが、思春期の子どもを書く時に、特に気をつけていらっしゃることはありますか。

花形

思春期って、ばかで、恥ずかしいけれど、それがすごくいとおしくて、好きなんです。だから、気をつけているとしたら、ばかで恥ずかしいけど美しい、というところを書かなければ、ということかな。

土居

中学生、高校生ぐらいの思春期の読者からの反響はありますか。

花形

『アート少女』を読んで送ってくださったお手紙で、私がすごく感動したものがありました。長野の中学 3 年生の女の子からで、その子も「美術部」なのですが、まわりからオタクの集団と見られるがすごくいやで、クラブをやめようかと思ったそうです。けれども『アート少女』を読んだら、みんなアートが好きでがんばっているのだというのがわかったと書いてありました。そして、文化祭の前に部員みんなに『アート少女』を読ませたら、みんなが燃えて、例年になく展示品のテンションが高かったのは『アート少女』のおかげですと言われた時には、感激しました。

土居

すごいですね。

花形

お世辞かなと思ったのですけど、本当にうれしかったです。

土居

その『アート少女』は、先ほどの『Fragile―こわれもの』に収められている「アート少女」の続きですよね。

花形

そうです。続きです。

土居

登場人物の名前は、画家の名前をもじっているのですよね。部室を取り上げられた美術部が放浪の旅に出るのです。そして、格好いい野球部の男の子をモデルにしてみんなで描いた絵がよく売れて、文化祭の費用に充てようとしたら、校長に見つかってしまいます。それで、その野球部の男の子に助けてもらって、さびれかけた商店街のガレージに絵を描くことになります。個性的な草間さんという

部員も来て、みんなでガレージに絵を描いている間に、だんだん友だち関係ができてくるというようなお話です。友情や友だち関係を書くことが多いですよね。

花形

そういうものは好きですね。

土居

『少年ジャンプ』世代ですもんね。

花形

『少年ジャンプ』人間なんですよね。恋愛体質じゃないのです。「恋愛はめんどくさい」というところがあって、「やっぱり、友情」みたいな感じです。そのあたりは、性格的におっさんですね。

土居

もちろん家族は書かれていますが、友情を書かれることが多いですね。

花形

友情は、すごく好きです。友情を書くと、自分でもけっこう燃えます。ただし、本人は、ひとりでいても平気なタイプです。作家って、ひとりでいる時間が長いのが耐えられなかったらなれないと思います。

でも、私は、子どもの時に友だちに助けられているのですね。私には弟がいるのですが、母親はその弟を溺愛していました。母親は専業主婦なのですが、弟は身体が弱いからお弁当を作ってあげるけれど、あなたは丈夫だからパンを買って食べなさい、という人間でした。身体が弱いといっても、弟はちょっと胃が悪いぐらいなのですが。もしかすると母親は、「姉の方は何を食べても死なないけれど、弟は気をつけないと死んじゃうかもしれない」と思っていたのかもしれません。そういう母親なので、中学の友だちに愚痴をこぼしました。そしたら、「よく不良にならなかったね。あんたは偉い」とほめられたのです。それで救われました、「そっか。この状況で、不良にならない自分は偉いんだ」と。

ふり返ってみると、人生のふしめふしめで、私は友だちに助けられています。それも、「友情」と大上段に構えた感じではなくて、さりげなく助けてくれました。友だちがいなかったら、どうなっていたかわかりません。

土居

中学ぐらいのころは、友情が大切な時期ですよね。そういう意味では、花形さんがお書きになっているテーマは、読者に求められているテーマとすごくマッチしているように思います。

花形

そうですね。

（８）今後の抱負

土居

これからもどんどん書いていただきたいと思います。最後に、今後の作品の抱負をお願いします。

花形

遊び塾などの体験は、私にとってはリアルですが、今の時代ではファンタジーかもしれません。実は、先月、『椿先生、出番です！』[28]という本を出版しました。舞台は幼稚園で、子どもたちと先生は遊びまくっています。自分の体験の底を掘り起こして、これまでになく楽しくてかわいいファンタジーが書けたように思います。

というわけで、積もり積もって固くなってしまったそれらをもう一度掘り起こして発酵させ、それを腐葉土にして新しい花を咲かせたいと思います。

土居

花形さんの「ゴジラ」のシリーズで、男の子が主人公の最後の物語は『一瞬の原っぱ』ですが、花形さんの作品には、原っぱに象徴されるような遊びの空間や心の余裕やユーモアが共通したおもしろさとしてあると思います。

花形

原っぱは好きです。教育がどうのこうのという前に、「原っぱ作って、そこで子どもたちをかってに遊ばせればいいのに」というのが私の気持ちです。全ては、すごく単純なことなのではないかと。

土居

いたらない司会でしたが、すてきなお話をしてくださってどうもありがとうございました。参加してくださったみなさんも、どうもありがとうございました。

花形

ありがとうございました。

---

[1] 児童文学作家
[2] 『Fragile こわれもの』　石橋洋司、長崎夏海、令丈ヒロ子、花形みつる/著　ポプラ社　2007 年 7 月より
[3] アルブレヒト・デューラー（1471 年～1528 年）。ドイツのルネサンス期の画家。
[4] 2009 年 1 月～3 月　フジテレビ系で放送されたドラマ。原作は『マーガレット』連載宮城理子「メイちゃんの執事」。
[5] 『アート少女』　花形みつる/著　ポプラ社　2008 年 4 月
[6] 『少年少女世界全集』全 50 冊　講談社　1959 年～1962 年
[7] 『セブンティーン』　集英社　1967 年～
[8] 『怪盗こうもり男爵』　飛鳥幸子/作　新書館　1979 年 8 月
[9] 『ドリトル先生物語全集』全 12 巻　ヒュー・ロフティング/作　井伏鱒二/訳　岩波書店　1961 年 9 月～1962 年 6 月
[10] 『やかまし村の子どもたち』『やかまし村春・夏・秋・冬』『やかまし村はいつもにぎやか』リンドグレーン/作　大塚勇三/訳　1965 年 5 月、7 月、9 月
[11] 『風にのってきたメアリー・ポピンズ』パメラ・リンド・トラヴァース/著　林容吉/訳　岩波少年文庫　岩波書店　1954 年 4 月他
[12] 『少年マガジン』講談社　1959 年～
[13] 『カナリヤ姫』　講談社の絵本 178　岡本良雄/文　相沢光朗/絵　講談社　1957 年
[14] 『ゴジラの出そうな夕焼けだった』　花形みつる/著　河出書房新社　1991 年 3 月
[15] 『逃げろ！ウルトラマン』　花形みつる/著　河出書房新社　1991 年 7 月
[16] 『半魚人あらわる』　花形みつる/著　河出書房新社　1992 年 7 月
[17] 『一瞬の原っぱ』　花形みつる/著　河出書房新社　1995 年 4 月
[18] 『永遠のトララ』　花形みつる/著　河出書房新社　1996 年 9 月
[19] マンガ『巨人の星』に登場する星飛馬のもう 1 人のライバル。
[20] 『ドラゴンといっしょ』　花形みつる/著　河出書房新社　1997 年 8 月
[21] 『サイテーなあいつ』　花形みつる/著　講談社　1999 年 12 月
[22] 『ぎりぎりトライアングル』　花形みつる/著　講談社　2001 年 4 月
[23] 『フルメタル・ビューティー』1、2　花形みつる/著　講談社　2005 年 2 月　2007 年 12 月
[24] 『荒野のマーくん』　その試練/その受難　花形みつる/著　偕成社　2006 年 3 月
[25] 『Lost and Found　–　さがしもの』　石橋洋司/他著　ポプラ社　2008 年 9 月
[26] 『ラブ＆ランキング』　花形みつる/著　ポプラ社　2007 年 4 月
[27] 『週刊少年ジャンプ』（集英社）連載のマンガ（1984 年～95 年）。　鳥山明/作
[28] 『椿先生、出番です！』　花形みつる/著　理論社　2009 年 1 月

資料

花形みつるさんブックリスト

2009 年 2 月 26 日

＜子ども向き＞

「スプラッシュ」　『スプラッシュ』　日本児童文学者協会/編　ポプラ社　2002 年 4 月
『ドラゴンといっしょ』　竹内美紀/挿画　ものがたりうむ　河出書房新社　1997 年 8 月
『サイテーなあいつ』　垂石真子/絵　わくわくライブラリー　講談社　1999 年 12 月
『ぎりぎりトライアングル』　浜田桂子/絵　わくわくライブラリー　講談社　2001 年 4 月
『グッバイムカつきベイビー』　山口みねやす/絵　きらきらジュニアライブシリーズ　佼成出版社　2001 年 4 月
『わがままガールズ』　藤田裕美/絵　佼成出版社　2003 年 9 月
『ベッシーによろしく』山西ゲンイチ/絵　学研の新しい創作　学習研究社　2005 年 10 月
『フルメタル・ビューティー！』　1　おおたうに/画　YA! entertainment 講談社　2005 年 2 月
『荒野のマーくん　その受難』　やまだないと/絵　偕成社　2006 年 3 月
『荒野のマーくん　その試練』　やまだないと/絵　偕成社　2006 年 3 月
『フルメタル・ビューティー！』2　おおたうに/画　YA! Entertainment　講談社　2007 年 12 月
『ラブ＆ランキング！』　宮尾和孝/絵　ポプラの森　ポプラ社　2007 年 4 月
「アート少女」『Ｆｒａｇｉｌｅ－こわれもの』　石崎洋司/他著　teen’s best selections ポプラ社　2007 年 7 月　ピュアフル文庫ジャイブ　2008 年 1 月
『アート少女』　中村佑介/カバー・扉イラスト TEEN’S ENTERTAINMENT ポプラ社　2008 年 4 月
「いっちゃん」『Lost and Found－さがしもの』　石崎洋司/他著　teen’s best selections　ポプラ社　2008 年 9 月
『椿先生、出番です！』　理論社　2009 年 1 月

＜大人向き＞

『ゴジラの出そうな夕焼けだった』　鈴木康代/装画　河出書房新社　1991 年 3 月　河出文庫　1994 年 11 月
『逃げろ！！ウルトラマン』　河出書房新社　1991 年 7 月
『半魚人あらわる』　河出書房新社　1992 年 7 月
『花形みつるの「こどもの事情」講座』　河出書房新社　1994 年 11 月
『一瞬の原っぱ』　河出書房新社　1995 年 4 月
『永遠のトララ』　河出書房新社　1996 年 9 月

*単行本のみにさせていただきました。

大阪府域での
子どもの読書活動の報告

２００８年度大阪府子ども読書活動推進連絡協議会　活動報告

次の文部科学省の委託事業を大阪府子ども読書活動推進連絡協議会が企画運営を担当し、関係機関・団体と連携協力しながら実施した。なお、事務局は財団法人大阪国際児童文学館が担当した。

文部科学省委託事業「子ども読書応援プロジェクト」

Ⅰ．「親子で取り組む読書活動の推進に関する調査研究」事業

１．実行委員会開催

開催日：2008年9月26日（金）、10月23日（木）、11月13日（木）

参加者：豊能町立図書館職員、ボランティア、
大阪府子ども読書活動推進連絡協議会会員

場　所：豊能町立図書館

２．連続講座開催：「ゆっくり子育て」講座

第１回　日　時：2009年1月22日（木）13:30～15:30

場　所：豊能町立図書館集会室

講　演：「赤ちゃんと絵本を楽しむ」

講　師：渡辺順子さん（すずらん文庫）

参加者：45人（保護者・ボランティアの方など）

第２回　日　時：2009年2月12日（木）10:15～12:00

場　所：豊能町立図書館集会室

講　演：「赤ちゃん絵本で子育て支援」

講　師：吉見和美（豊能町立図書館）
尾崎ゆかり
（豊能町地域子育て支援センターすきっぷ）
藤岡恵子（豊能町保健センター）
土居安子（財団法人大阪国際児童文学館）

参加者：21人（ボランティアの方など）

３．啓発リーフレット「親と子が楽しむはじめての絵本」印刷・配布

部　数：45,000部

配布先：保健センター・図書館等

Ⅱ．「青少年のためのオーサー・ビジット」事業

１．実行委員会・打合せ開催

①開催日：2008年11月13日（木）

参加者：大阪府子ども読書活動推進連絡協議会会員

場　所：豊能町立図書館

②開催日：2008年12月8日（月）

参加者：箕面市立第一中学校教諭、同学校司書、箕面市立第二中学校学校司書大阪府子ども読書活動推進連絡協議会会員

場　所：箕面市立第一中学校

③開催日：2008年12月17日（水）
参加者：講師・花形みつる、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会会員
場　所：東京都渋谷区
④開催日：2008年12月17日（水）
参加者：講師田中清代、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会会員
場　所：相模原市藤野
⑤開催日：2009年2月5日（木）
参加者：箕面市立第二中学校教諭、同校司書、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会会員
場　所：箕面市立第二中学校
⑥開催日：2009年2月9日（月）
参加者：箕面市立第一中学校教諭、同校司書、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会会員

２．オーサー・ビジット実施

①日　時：2009年2月11日（水）14:00～16:00
場　所：大阪府立国際児童文学館講堂
講　師：田中清代（絵本作家）
参加者：小学生　34人
内　容：持参した野菜を主人公にした見開きの絵本を制作し、発表を行い、田中さんが講評をした。
②日　時：2009年2月12日（木）6限目
場　所：箕面市立第二中学校3年生教室
講　師：花形みつる（作家）
参加者：中学年3年生1クラス　33人
内　容：事前に「アート少女」を読み、当日、花形さんから登場人物の紹介を聞いた後で、生徒が登場人物へのメッセージを書いた。最後にメッセージを紹介し、花形さんがコメントと創作の工夫等を話した。
③日　時：2009年2月12日（木）放課後
場　所：箕面市立第二中学校図書館
講　師：花形みつる（作家）
内　容：花形さんを囲み、創作や読書等について質疑応答を行った。
④日　時：2009年2月13日（金）1～3限目
場　所：箕面市立第一中学校視聴覚室
参加者：202人
内　容：事前に「アート少女」を読み、当日、花形さんから登場人物の紹介を聞いた後で、生徒が登場人物へのメッセージを書いた。最後にメッセージを紹介し、花形さんがコメントと創作の工夫等を話した。

Ⅲ．「子ども読書応援団派遣」事業

１．実行委員会開催

開催日：2008年12月2日（火）
参加者：森崎シヅ子（研修講師）、大阪府子ども読書活動推進連絡協議会会員

２．研修開催

第１回　日　時：2009年1月7日（水）10:00～16:00

場　所：大阪市立中央図書館大会議室

講　師：森崎シヅ子（熊取文庫連絡協議会代表）

講　演：「中学生におはなし・絵本をとどける」

参加者：98人

内　容：講師のはなしを聞き、中学校で実施するおはなし会のプログラムに関するワークショップを行った。

第２回　日　時：2009年1月8日（木）10:00～16:00

場　所：大阪府立国際児童文学館講堂

講　師：第１回と同じ

講　演：第１回と同じ

参加者：50人

内　容：第１回と同じ

３．おはなし会実施

大阪府内15市町、中学校36校でボランティアによるおはなし会を実施

（事前に打ち合わせを実施）

Ⅳ．活動報告・講演会・交流会開催

場　所：ホテルアウィーナ大阪

日　時：2009年2月26日（木）13:00～16:30

内　容：

第１部　活動報告

報告者：

「乳幼児と絵本」に関する講座

土居安子（大阪国際児童文学館）

「オーサー・ビジット：花形みつるさん

東谷めぐみさん（箕面市立第二中学校学校司書）

「オーサー・ビジット：田中清代さん」

土居安子（大阪国際児童文学館）

「中学生におはなし・絵本をとどける」（同上）

第２部　講演会「10代の子どもの本を書く」

講　師：花形みつるさん（作家）

第3部　交流会

子どもの読書活動にかかわる人たちで情報交換し、交流を深める

Ⅴ．報告書作成

内　容：2008年度の活動報告、講演会概要、中学校でのおはなし会事例報告等

部　数：600部

配布先：府内の図書館、関係機関・団体など

活動報告　Ⅰ

「乳幼児と絵本：ゆっくり子育て講座」（豊能町立図書館）

報告日：平成 21（2009）年２月 26 日（木）　場　所：ホテルアウィーナ大阪

報告者：財団法人 大阪国際児童文学館　土居安子

１．豊能町の現状について

典型的な新興住宅地に人口の 8 割が暮らしている豊能町は、文化や教育にとても高い関心を寄せる住民が多いが、地域のために活動するとなるとグループが育ちにくく、住民どうしの横のつながりが希薄である。年間の子どもの出生数は 80 人を切り、高齢化が進んでいる。時間に余裕のある世代の地域参加がより活発になれば、子育て支援のさまざまな活動に厚みがでると期待し、本事業を行うこととした。

２．実行委員会の開催

平成 16 年度に「豊能町子ども読書活動推進計画」を策定。絵本講座等基礎的な講座に参加した地域住民と、いかに子育て支援活動を協働して行っていけるか、また図書館としてどのように支援体制を整えるかが課題であった。そこで、過去の講座参加者に呼びかけて本事業を行う実行委員会を立ちあげ、２回の会合を通して事業内容の立案と参加者どうしの交流を図った。

３．「ゆっくり子育て講座」第一回「赤ちゃんと絵本を楽しむ」の開催

＜アンケートから＞

・絵本の大切さを実感しました。
・0 歳児での読みきかせの意義が良くわからなかったのですが、渡辺さんのお話はよくわかってよかったです。
・絵本が子どもにとってどれほど大切なことかがわかりました。1 語 1 語を大切に子どもの表情を感じながら読みたいと思いました。
・向い合って「表情」を感じることの大切さを学びました。
・コミュニケーションの大切さ、家庭のだんらんこそが大切なことというのがよくわかりました。
・人とのかかわりが少なくなった今こそ、絵本を通して会話を楽しむことや、ことばの大切さなどを改めて感じました。
・子どもの成長にとって絵本がどれだけ重要かということを改めて思いました。
・絵本と向きあう姿勢をわかりやすく講演していただきありがとうございました。

４．「ゆっくり子育て講座」第二回「赤ちゃん絵本で子育て支援」の開催

＜アンケートから＞

・幼児の絵本の選び方をあまり考えたことはなかったが、どの年代の子どもに対してもふさわしい絵本を選ぶことが大事なのだとよくわかった。
・実際の取組みにつながった。
・赤ちゃん絵本の選び方の難しさを実感した。

５．成果と課題

子育て支援にかかわりを持とうとするボランティアの方の絵本の勉強会を図書館がサポートして立ちあげることができた。今後、自立した活動が継続してできるよう連携・支援していきたい。また、新しいグループが生まれるための活動を行ったり、グループどうしのネットワークを密にしたりできるよう図書館としても働きかけを行いたい。

「ゆっくり子育て」講座

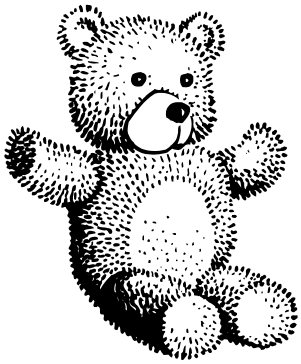
第1回

赤ちゃんと絵本を楽しむ

日時：平成21年１月22日（木）午後１時30分～３時30分

会場：豊能町立図書館集会室

講師：渡辺順子さん（すずらん文庫）



この講座を通して、保護者や乳幼児の子育て支援に関わっている方々が、絵本の魅力や乳幼児と一緒に絵本を楽しむ方法等を学びます。

対象：乳幼児の保護者、
乳幼児の子育て支援に関わっている人。
（読書ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ、保育ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ、保育士など）

定員：60人

保育：10人　就学前までの満１歳以上の幼児対象。豊能町立図書館へ直接、または電話でお申し込みください。保険代１人１００円（実費）

第2回　（注）第１回講座を受講した方が対象です。

赤ちゃん絵本で子育て支援

日時：平成21年２月12日（木）午前10時15分～正午

会場：豊能町立図書館集会室

この講座によって、乳幼児の子育て支援に関わっている方々のネットワークづくりを進めるとともに、絵本の選び方や読み方等について学びます。

対象：乳幼児の子育て支援に関わっている人。
（第１回講座を受講した人に限ります）

定員：40人

内容：◆リレートーク「豊能町の子育て支援」（60分）
◆講座「赤ちゃん絵本を楽しむ」（45分）
講師：土居安子（財団法人大阪国際児童文学館）

保育：10人　就学前までの満１歳以上の幼児対象。豊能町立図書館へ直接、または電話でお申し込みください。保険代１人１００円（実費）

【申込み方法】

参加申込みは講座第１・２回とも、12月3日（水）から、豊能町立図書館へ直接、または電話でお申し込みください。

問い合わせ・申込先：豊能町立図書館　072-738-3304

主催　大阪府子ども読書活動推進連絡協議会・豊能町立図書館

活動報告　Ⅱ－１

「オーサービジット：田中清代さん」（大阪府立国際児童文学館）

報告日：平成 21（2009）年２月 26 日（木）　場　所：ホテルアウィーナ大阪

報告者：財団法人 大阪国際児童文学館　土居安子

１．日時　2009 年２月 11 日（水・祝）14 時～16 時
２．場所　大阪府立国際児童文学館　講堂
３．対象　小学生
４．人数　３４人
５．準備するもの：光沢紙、ニードルペン、ポスターカラー、両面テープ、ウエス、ティッシュペーパー、好きな野菜一つ
６．当日の流れ
① 田中清代さんの紹介
② 作品を作るための説明
テーマ：野菜を主人公にした銅版画ふう絵本を作る。
持ってきた野菜が主人公の三見開き（６ページ）の絵本を銅版画っぽく使って作る。
・中のページ用３枚と表紙用１枚の色を選び、順番を決めて両面テープで絵本の体裁を作る。
・持ってきた野菜を主人公にした絵本を作る。絵コンテに、または直接、絵とことばを書いて絵本を作る。ことばはボールペンを使用することもできる。
・ニードルペン、ポスターカラーの使い方、効果の説明。
③ 制作
(1)５×10ｃｍ程度の紙（Ａ４　1/３）３枚を絵本のように貼り合わせる（好きな色を選ぶ）。
表紙と裏表紙になる紙（Ａ４　1/２）の両端を折ったものを表紙として貼る。
→絵本の形態ができる。（両面テープを使用）。
(2)光沢紙にニードルペンで傷をつけ、そこにポスターカラーを埋め込み、ボロ布かティッシュペーパーで拭きとる。
④ 発表（実物投影機にうつして発表）
⑤ 田中さんからの講評
⑥ 田中さんの絵本の紹介、ブックリストの配布、アンケート

終了後、サイン会

アンケートから

回答数：３２名

１．もよおしについて

たいへんよかった：２４　よかった：６　　ふつう：２　つまらなかった：０

２．おもしろかったところ

絵をかくところ。ニードルでけずづところ。えのぐをつかったところ。えほんをつくって、よんでもらえる。絵本を作れたこと。ストーリーを考えるのはむずかしかったけどそこがいちばん楽しかった。

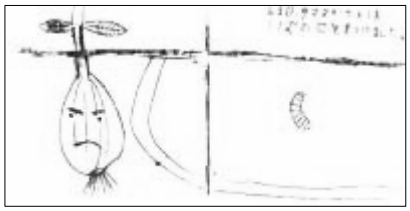
３．今後してみたいこと

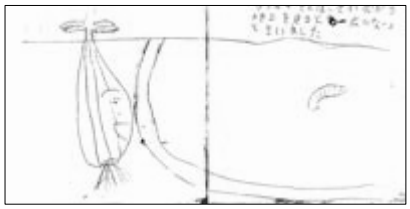
また本を作りたい。家でもやってみたい。絵本をかきたい。もうちょっとページ数の多いものを牛乳パックで作りたい。大きな本をつくること。はんがをしてみたい。

４．感想

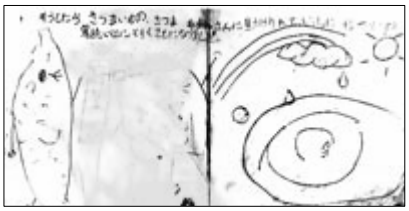
いいのができて楽しかった。楽しかったからまたやりたい。良いけいけんができた。ニードルでかいたのはちょっと手がつかれたけどおもしろかった。本づくりがこんなに楽しいとは思わなかった。本はよんで楽しいだけでなく作っても楽しいと思うことができてとても楽しかったです。今日ので絵本の作り方がわかりました。いがいと時間がかかりました。楽しかったです。少しむずかしかった。

作品例





『たまねぎさん』



『じゃがたろう』

活動報告　Ⅱ－２

「オーサービジット：花形みつるさん」（箕面市立第一中学校・第二中学校）

報告日：平成 21（2009）年２月 26 日（木）　場　所：ホテルアウィーナ大阪

報告者：箕面市立第二中学校図書館司書　東谷めぐみ

１．概要

①日時・場所

２００９年２月 12 日（木）　箕面市立第二中学校３年生１クラス　第６校時

２００９年２月 13 日（金）　箕面市立第一中学校１年生（全５クラス）

２＋２＋１クラス　第１校時～第２校時

②担当者

第一中学校　教諭　酒本あゆみ　司書　鶴長幸子

第二中学校　教諭　西尾尚子　　司書　東谷めぐみ

③対象作品:「アート少女」(『Ｆｒａｇｉｌｅ－こわれもの』石崎洋司･花形みつる他/著　ポプラ社　2007 年７月より)

④目標 :「アート少女」のキャラクター造型を楽しみ、一人の登場人物を選んでメッセージを書くことができる。

⑤準備するもの : 作品、あらすじと登場人物説明のプリント、ひとことメッセージを書くワークシート、ブックリスト、花形みつるさんの本

２．作品・活動について

花形みつるの作品は、個性的な登場人物がいきいきと描かれており、ユーモラスなせりふが楽しい。特に、「アート少女」は短編の中に、性格の異なる４人の成長する中学生が描かれており、テーマも権威に対する申し立てという中学生に身近なテーマとなっている。

登場人物を理解するためには、作品を読むと同時に、その登場人物を読者として客観的に見ることが必要である。

そこで、一人の登場人物を選び、その登場人物にメッセージを送るという活動を行うことによって、登場人物を深く理解すると同時に、作家がどのような意図で人物を造型したのかを探る作業を行い、作家の批評を聞くことによって、文学作品における人物造型のありように触れることを目的とする。

３．目的

①「アート少女」の作品と登場人物を知る
②登場人物の中から一人を選び、メッセージを書く
③メッセージを発表し、作家のコメントを聞くことによって人物造型のありようを知る。

４．展開

導入
　花形さんの紹介
展開１
　花形さんによるあらすじ・登場人物の紹介
展開２
　メッセージを書く→発表　（第二中学校第三学年）
　メッセージを書く→集める→発表（第一中学校第一学年）

展開３
　メッセージの紹介＋花形さんのコメント
まとめ
　花形さんからの一言メッセージ
　花形さんの本の紹介

「花形さんを囲む会」２月１２日（木）１６：００～１７：３０　於：第二中学校図書館

オーサービジット授業を第6時限に行い、その放課後、図書館で「花形さんを囲む会」開催。自由参加。

参加者：生徒12人＋5，6人（周りで聞いている生徒）、教職員3人

資料１

「アート少女」に出てくるキャラクターたち

「アート少女」のあらすじ

横浜のとある中学校の美術部は部員がたった４人だったが、大きな部室を持っていた。ところが新しく着任した校長先生は補習授業をする場所を確保するために、美術部の部室を没収すると部長の根岸節子に言いわたした。

節子は同じ２年の芳子に相談するも、芳子は本気になってくれず、「美術部をやめて勉強に専念する」といい出す始末。節子は、１年生でオタクの梅原、美術部室登校をしている青木をなかば強引に誘って退去命令の反対署名を集めることを決意。

ところが、署名のために梅原が作ってきたビラは校長の横暴を糾弾するシリアスな文面のバックで巨乳猫耳少女がポーズをとっているというもの。節子のクラスメートはひくし、梅原はクラスメートにいじめられるし、ビラを見た校長は激怒して、美術部をロクでもない生徒のたまり場で存在する価値もないと決め付けた。

この状況を全く納得できない節子は作戦その２を計画。それは部室のある四階にバリケードを築いて部室に立てこもるというものだった。

青木は花火を提供し、梅原はお菓子を提供した。放課後、十五連発ドラゴンやロケット花火を部室の窓からハデにぶちあげて生徒を中庭に呼びよせ、『校長は、我々美術部と話し合え』という垂れ幕を吊るした節子たち。怒った校長は、首謀者の節子を登校禁止処分にすると恫喝。ひるまず「生徒の話を聞くべき」と主張して花火を打ち続ける節子たち。追い詰められた校長は、ついに、「要求はなんだ」と譲歩する。節子は「美術部廃部の撤回と部室の存続」を要求するが、校長は「部室の存続」を拒否。根岸節子は部室をあきらめて、青木の居場所と梅原のフィギュアのコレクションの置き場所の確保を要求しようとするが、梅原は「センパイの登校禁止処分をなしにしてください！」と校長に訴え、青木も「センパイ、いってたでしょ。場所なんかなくてもアートはやれるって。でも、センパイがいなかったら、美術部じゃなくなっちゃうでしょ」と言う。その時、先生たちによってバリケードが破られた。

次の日、芳子が二百人以上の署名を持ってやってくる。そして、美術部をやめるのをやめると告げる。青木は美術教官室登校になり、梅原のフィギュアは青木の家で預かってもらうことになった。

そして、部室を明け渡す最後の日、「部室をいっぱいの作品で飾ってあげよう」という芳子の提案でひらいた展覧会に、たくさんの観客が来てくれた。根岸節子は夏休みにおばあちゃんの家で描いた海のスケッチを、青木は大きなカンバスの上で色彩が爆発しているような不思議な絵を、梅原はマンガを展示した。

＜４人の美術部員たち＞

根岸節子　中学２年。美術部の部長。去年卒業した美術部前部長の横山センパイにあこがれている。作戦その１、その２を計画、実行。

せりふの中から

「そ、それに、センパイになんていえばいいの。私たちの代でこんなことになっちゃったら、もう合わせる顔がないよ」

「アートはさ、やろうと思えば、場所なんてなくてもできるでしょ。心があればできるでしょ。だから、部室はもういい。あきらめた。でも、自分が大切にしていたものを、あんなヤツにバカにされたことだけは我慢できない」

「校長先生は頭ごなしに部室から出て行けというばかりで、私たちの話を一度も聞こうとはしませんでした。どっかの国の独裁者じゃあるまいし、生徒の話も聞くべきです」

狩野芳子

中学２年。幽霊部員。キース・ヘリングみたいなポップな絵が得意な芳子は、「デッサンはすべての基本」という節子の意見に賛成できない。節子の「部長なんてやりたくなかったのに、みんなであたしに押し付けて」ということば以来、部室に行かなくなった。

校長先生に部室を引き渡すように言われたとき、根岸節子に相談を受けたが、塾を優先させ、署名もひとまず預かったという感じだったが、根岸たちが事件を起こした後で、200 名の署名を集め、美術部をやめないことにして、「さよなら愛しの部室展」を提案する。

せりふの中から

「なんか節子って、センパイのこと、意識しすぎだよ。ここは中学の美術部なんだからさー、とりあえず楽しければいいんじゃないの。アートって、もともとそーゆうもんだし」

「みんなでしみじみしてるときに悪いんだけど・・・・・、美術部って、なんか、いきなりおもしろくなったんじゃない。」「だから、あたし、やめるの、やめるかも」「ってことで、あたしとしては、このまま引きさがるのは惜しい気がするのよね」「ねえ、もう一度、なんかやってみない」「美術部だけのちょっと早めの文化祭を、明日、ここでやるってのは？最後の日に、部室をいっぱいの作品で飾ってあげるの」

青木繁生　**青木クン**

作品から

青木クンは、私（根岸節子）が部室に来てから、まだ一度も声を発していない。それどころか、視線もまったく合わせない。

青木クンは、四月に入部してからずーっとこの調子。

（中略）

その青木クンは、またの名を『部室登校のアオキ』といわれている。

保健室登校。あれの部室バージョンだ。

青木クンと同じ小学校出身の梅原によれば、小学生のときからヒトとコミュニケーションするのが苦手で不登校気味だったとか。無理やり学校に連れてこられて、土砂降りの中を裸足で逃げ帰ったこともあるらしい。

で、中学生になってからは、いちおう登校はするんだけど、教室は素通りして、そのまま部室に直行

するようになってしまったのだ。
（中略）
　こうして一日中、部室で絵を描いてるか、窓の外を眺めて過ごしている青木クン。
　なにを見ているんだか外の景色をぼうっと眺めているときの青木クンは、なんだか夢の国のヒトのようで、シャガールの描く儚げな人物にちょっと似ている。

せりふの中から

「花火ならありますけど」「夏休みにホームセンターの半額セールで買ったんだけど・・・」「一人じゃ全部やりきれなくて」「部室は風通しがいいから、ここなら来年まで湿気ずにもつかも、と思って・・・・」
「センパイ、いってたでしょ。場所なんかなくてもアートはやれるって。でも、センパイがいなかったら、美術部じゃなくなっちゃうでしょ」
「ボクの絵はこれです」

梅原龍之介

作品から

　梅原は、私の「時間厳守でお願いします」に、あやつり人形のようにカクカクとうなずくと、パソコンのサウンドボードで合成されたような声でブツブツといいわけをしながら、机の上にデイパックをおろした。
　運動もしていないのに大汗かいている梅原のせいで、部室の温度が三度上がった。
　小太り、色白、メガネで曖昧な長髪という、わかりやすい見かけから推測されるとおり、梅原はオタクだ。
　今、梅原がはまっているのは、ヴィジュアル系のキャラ勢ぞろいって理由でブレイクしているファンタジーアクションアニメ。
　きっとあのパンパンにふくらんだデイパックの中味は、新しく買い込んだそのフィギュアだ。
　「ボクのコレクション、部室に飾ってもいいですか」とか聞かれて、ついうっかり「いいよ」なんてこたえてしまった自分（根岸節子）がウカツだったとはいえ、梅原が持ち込んだフィギュアはアッとゆー間に増殖し、部室の棚という棚がアニメの美少女キャラや巨大戦闘ロボットに侵食されて、アートのエリアが今ではオタクの殿堂に変貌しそうな勢いだ。
　はっきりいって、ジャマ。
　それで以前、「その棚のおもちゃ、少し片付けてくれないかな」とやんわり注意したことがあったんだけど、「おもちゃなんかじゃありません。フィギュアはれっきとしたアートです」なんて、珍しく反抗的な態度を示したものだから、それ以後、触れないようにしているのだ。

せりふの中から

「マンガもアニメもゲームも、もちろんフィギュアも、日本のポップカルチャーは世界最強なんです。世界に通じる普遍性があるんです」
「ですよねー。ボクなんて、ただでさえキモいとかバカにされてるのに、これでもうカンペキ、ハブかれますよね。なのに・・・・」「なのに。困ったことに、ボク、今ちょっと楽しかったりしてるんです」
（注：作戦２を実行しながら）
「要求を変えます。部室はもういいです。そのかわり、センパイの登校禁止処分をなしにしてください！」

資料２

（　　）に　ひとこと！

４人のキャラクターの中から一人を選んでそのキャラクターに一言メッセージを書いてください。はげましでも、おしかりでも、アドバイスでも何でもいいです。

組　　名前（　　）

このワークシートをつかって　中学生から登場人物にひとこと！

根岸節子にひとこと

○　美術部の部室を校長にとられそうになって、作戦を計画したり、実行したりすることはすごいことだと思った。（中３　男子）

○　作戦その２の大胆さに、あるいみ尊敬しちゃいました。しゃべったらおもしろそう！（中３　女子）

○　おもしろすぎ！！花火はすごくいい提案だと私は思います。節子さんが一度キレたら大変なことになるんですねっ！！美術部のために頑張ったね！私ならピストル使うかも！！（笑）やりすぎか･･･。私が節子なら、校長に向かって花火飛ばしたいです。（ロケット花火）（中３　女子）

○　自分も中学２年でクラブの部長になったので、部長をすることの不安はとても大きいのはわかります。同じ学年の芳子も少し頼りないけど、自分の大好きな部活動のため、先輩のため、自分のために、最後まで頑張ったところが、とても私と似ていたので親近感がわきました。校長先生と戦うなんて、とても勇気のある行動だと思います。そのパワーを生かして美術部をつないでいってほしいと思いました。（中３　女子）

○　行動力があり、バリケードをはるとか、部室から外にむかって花火を乱射するのはすごいと思いました。美術部が本当に大切だから守っているのがすごく伝わりました。（中３　男子）

○　たった４人の部活で大きな部室は必要ないと僕は思います。さらにそんなことで、とても大きいさわぎをおこす、そんな性格は良くないと思います。（中３　男子）

○　先輩たちを気にしすぎだと思う。自分なりのアートを生みだして美術部を華やかにしたらいいと思った☆部屋をなくさないようにした作戦、もうちょっと計画的にやったら、もしかすると･･･成功したかも･･･。節子の性格はあんまり好きじゃないと思った･･･。でも、青木くんと梅原を変えたのは凄いと思った！！これからもアートを続けてほしい！（中３　女子）

○　横山センパイの後をしっかりつごうとしているのがエライと思いました！！美術部の部室を守ろうとするシーンでは節子さんの一生懸命さに感動しました！これからも美術部をがんばって守ってください☆　（中１）

○　自分が思っている事を☆ズバッ☆と言える所が好きです。部長としてむいていると思います。　（中１）

○　中学２年で部長になってすごく大変だと思う。でも、前のセンパイがどんなにすごい人たちだったからといってそんなに気負いすることないんじゃない？１人で全部背負いこんじゃ後でしんどくなるだけ。今回の件で少しは頼れるようになった青木クン・梅原クン、部活に復帰してくれた芳子・・・・４人で頑張って！！　（中１）

○　友達にはしたくない。怖い。　（中１）

狩野芳子にひとこと

○　私は、花形みつるさんのフォローがなかったとしても、たぶんキャラクターの紹介を読んで狩野芳子を選んでいたと思います。私はどちらかというと女の子らしい性格よりサバサバしている女の子の方が好きなので、このどちらかで友達になりたいなと思うのは、狩野芳子だと思います。狩野芳子は黒白はっきりしていてよかったと思います。　（中３　女子）

○　この物語で一番現実を見ていると思うし、冷静だし、もし私がこの部に入っていたら、おんなじ風に根岸節子さんに接していると思う。でも、最後には 200 名の署名を集めちゃうなんて、めっちゃカッコイイと思いました。だいぶん冷めてるけど、なんやかんやで、１番まともなこと言ってるし、共感できます。　（中３　女子）

○　塾を優先させて部に来なくなっていたけど、心には美術のことでいっぱいみたいで本当はあつい人だなぁと思った　（中１）

○　最初はあまりいい印象ではなかったんだけど最後では「さよなら愛しの部室展」を提案したりして彼女は自由な発想というかアートが好きなんだなと思った。　（中１）

○　校長先生と戦わなくて少しひきょうだと思う　（中１）

○　節子から相談されたときあんなにつめたくしなくてもよかったと思います　（中１）

梅原龍之介にひとこと

○　梅原、オタクはキモイって、まちがってるよ。世の中にはさわやかなオタク好青年（少年）もいるのに･･･。世の中まちがってるよ！　梅原、節子さんはやめておいた方がいいと思う。たしかに、ひかれる所はあると思うけど、将来きっと大変･･･。　（中３　男子）

○　自分の好きなことがちゃんとあるのは、いいことだと思う。　（中３　男子）

○　最後の「センパイの登校禁止処分をなくしてください！」というセリフで感動した。　（中３　男子）

○　龍之介の名前がいい。　（中１）

○　マンガもアニメもゲームもすべてアートだっ！（フィギュアは除く）Me too Otaku!　（中１）

○　部室に自分のしゅみを持ち込むのはやめた方がいいと思う　（中１）

○　オタクとノーマルの切りかえをしたほうがいい。少しは一般論がわかるようになれ。オタクとしての同じ観点から言いました。　（中１）

青木クンにひとこと

○　教室に行こう！　（中３　男子）

○　登場人物の中ではキャラがうすいけど、人とのコミュニケーションさえできれば、登場人物の中で一番おもしろそうな奴っぽい。　（中３　男子）

○　最初ら辺は頼りないと思っていたけど、後半の節子への言葉は「おぉ～！青木！！」って感じで、青木クンを見直して、ちょっとかっこいいとも思えてきました。青木クンの書いた絵を見てみたくなりました。　（中３　男子）

○　最後から、きっとイケメン。　（中３　男子）

○　青木はなんだかひめた力をもっていそうだ　（中１）

○　人とコミュニケーションするのがにがてみたいだけど、美術部に入ってかわったと思います。アートは自分だけでやるものだけではないから、コミュニケーション取るのも大切だと思うけど、青木くんは絵がうまいらしいから、もっと心を絵で表現すればいいと思うのでがんばってください☆。　（中１）

モジリアニにひとこと

○　美術部をがんばって下さい。最後かっこ良かった。　（中３　男子）

校長先生にひとこと

○　もうちょっと生徒の心を理解した方がいい。　（中１）

活動報告　Ⅲ

中学生を対象とした読書活動「中学生におはなし・絵本をとどける」

報告日：平成 21（2009）年２月 26 日（木）　場　所：ホテルアウィーナ大阪

報告者：財団法人　大阪国際児童文学館　土居安子

１．目的

中学生以降の年代における読書量の低下が言われる中で、中学生におはなし会をとおして物語の魅力、読書の楽しさを地域の読書活動ボランティアが伝える。

２．中学校でのおはなし会までの流れ

①大阪府域の中学校へおはなし会実施の募集→１５市町３６校が応募
②市町村図書館へ協力依頼→ボランティアグループの確定
③研修講座・プログラム打ち合わせ：1 月 7 日（水）８日（木）

10:00～12:00	講　義 「中学生におはなし・絵本をとどける」 講師：森崎シヅ子（熊取文庫連絡協議会代表）
12:00～13:00	休　　憩
13:00～16:00	グループに分かれて中学校で実施するプログラム内容の打ち合わせ

④中学校とボランティアグループの打ち合わせ（含：図書館員）
⑤プログラムの確定→市町村図書館へ提出
⑥おはなし会の実施
⑦報告書・アンケートの提出

３．おはなし会の実施

１月～３月にかけて現在実施中。プログラム内容は報告書に掲載予定。

４．成果と課題

＜ボランティアグループへのアンケートから＞

- 中学校でのおはなし会のプログラムについて学ぶことができた。貴重な経験になった。
- 子どもたちが一生懸命聞いてくれて大きな喜びだった。
- メンバー間のつながりができた。
- 図書館との交流が密になった。
- 中学校とつながりができた。
- 今後も継続していきたい。
- 中学生におすすめの絵本など時々紹介してもらえるような研修があるとうれしい。
- もう少し日程に余裕がほしかった。

・　中学校への事業内容説明が不十分だった。
・　事業終了後の定着をいかに進めていくかが課題である。

＜中学校へのアンケートから＞

・　何かと忙しくゆとりのない学校生活を送ることを余儀なくされている子どもたちにとって心豊かに過ごせる時間になっていた。
・　おはなしを聞いた後、おはなしにでてきた歌をうたったりしていた。中学生でも自分で読むだけでなく聞かせてもらうことも好きだと感じた。
・　生徒に本を読む楽しさを伝えることができた。
・　図書の時間（総合）を週一時間通年でしているが、あたらしい風を吹き込んでもらった。保育実習や職場体験につなげることができると思う。
・　学校図書館にある本で生徒が興味のわく本を紹介してもらった。
・　この取組みをきっかけに、引き続きお願いしたい。地域と連携できた。
・　今回、経験したので、次に依頼するときに安心して頼みやすくなった。
・　クラスによっては私語が多く、聞こえずに話しの内容がわからなくなってしまったという意見もあった。
・　内容的に中学生にはものたりない場合もあり、ボランティアの方の力量も人によって違った。

＜事務局として＞

・準備期間・実施期間が短かったため、中学校、図書館、ボランティアグループに多大な迷惑をかけた。
・図書館とボランティアグループの連携づくり、中学校の受け入れ体制づくり、府としての支援体制づくりなどを府域という広域で行うことの難しさ。
・今後の継続に向けての取組み。

「中学生におはなし・絵本をとどける」中学校におけるプログラム内容

*プログラム内容は基本的に各グループから提出していただいたものをそのまま掲載しています。
「ジャンル」の項目：「絵本」＝絵本を読むこと
「タイトルの項目：『　』は図書名、雑誌名、「　」は作品名。

市	学年	プログラム内容				
		テーマ	ジャンル	タイトル	著者	出版社
池田市	1		おはなし	「山の上の火」		岩波書店
			絵本	『いろいきてる！』	谷川俊太郎・元永定正／絵	福音館書店
			絵本	『きつねとかわうそ』	イ・サン／文　ハン・ビョンホ／絵	
			絵本	『かおみえるかな』『かがくのとも』（03年6月号）		福音館書店
			絵本	『としょかんライオン』	ミシェル・ヌードセン／さく ケビン・ホークス／え	岩崎書店
			絵本	『だるまさんが』	かがくいひろし／作	ブロンズ新社
			絵本	『ふゆのおくりもの』『かがくのとも』（06年1月号）		福音館書店
池田市	1	ちょっとふしぎな・・・	おはなし	「アナンシと王」『子どもに聞かせる世界の民話』		実業之日本社
			おはなし	「岩じいさん」『子どもに聞かせる世界の民話』		実業之日本社
			詩	『かん字のうた』	川崎洋	
			絵本	『ぜつぼうの濁点』	原田宗典／作　柚木沙弥郎／絵	教育画劇
			絵本	『いろいきてる！』	谷川俊太郎・元永定正／絵	福音館書店
			絵本	『だるまさんが』	かがくいひろし／作	ブロンズ新社
			絵本	『つきよのかいじゅう』	長新太／作	佼制出版社
			絵本	『にんじんロケット』	佐々木マキ	福音館書店
			絵本	『ぼくはすすき』	細川剛	福音館書店
池田市	1		絵本	『あさの絵本』		アリス館
			絵本	『まさ夢いちじく」』		河出書房新社
			詩	「動物のじゃん」『しゃべる詩あそぶ詩きこえる詩より』		冨山房
			絵本	『ぽちぽちいこか』		偕成社
			おはなし	「くつやのドラフテカ」『千びきのうさぎと牧童』		
			おはなし	「そうだ村の村長さん」『しゃべる詩　あそぶ詩　きこえる詩』		
			おはなし	「あくびがでるほどおもしろい話」『おはなしのろうそく5』		東京こども図書館
			詩	「きこえることば」『しゃべる詩　あそぶ詩　きこえる詩』		
			絵本	『だるまさんが』	かがくいひろし／作	ブロンズ新社
			おはなし	「おはなしをしらなかった若者」『子どもに語るアイルランド昔話』		
和泉市			おはなし	「ならなしとり」		
			おはなし	「ねことねずみ」		
			手遊び	大阪にはうまいもんがいっぱいあるんやで		
			絵本	『あれこれたまご』	とりやまみゆき/作　中野滋/絵	福音館書店
			絵本	『つきよのかいじゅう』	長新太/作	佼正出版社
			パネルシアター	「わたし」		
			絵本	『光の旅　かげの旅』	アン・ジョナス/作	評論社
和泉市	1	Smile☆スマイル	大型絵本	『三びきのこぶた』	瀬田貞二／訳	福音館書店
			エプロンシアター	「おおきなかぶ」		
			パネルシアター	「カレーライスのうた」		
			牛乳パックシアター	「さよならさんかく」		
			紙芝居	「うなぎにきいて」	桂文我／脚本	童心社
			絵本	『三びきのコブタのほんとうの話』	ジョン・ジェスカ	
			大型紙芝居	「のみこみとっつあ」	寺村輝夫／著	あかね書房
泉佐野市	1		絵本	『ひゅるひゅる』	せなけいこ/作	童心社
			おはなし	「エパミナンダス」		
			絵本	『うさぎのさいばん』	キムセシル/文	少年写真新聞社
			おはなし	「オニの面」		
泉佐野市	1		絵本	『ゆき』	シュルビッツ/作	あすなろ書房
			おはなし	「ゆきむすめ」		
			絵本	『きつねのホイティ』	ウエッタシンハ/作	福音館書店
			おはなし	「ありと牛明神」		
泉佐野市	1		絵本	『ゆき』	シュルビッツ/作	あすなろ書房
			おはなし	「ゆきむすめ」		
			絵本	『きつねのホイティ』	ウエッタシンハ/作	福音館書店
			おはなし	「ありと牛明神」		
泉佐野市	1		おはなし	「ははおやのいうことをきかない息子」		
			絵本	『いつもちこくのおとこのこ　ジョン・パトリック・ノーマン・マクヘネシー』	ジョン・バーニンガム/作	あかね書房
			絵本	『三びきのかわいいおおかみ』	ユージーン・トリビザズ/文 ヘレン・オクセンバリー/絵	冨山房
			おはなし	「ハイエナの夢」		
泉佐野市	1		絵本	『いろながれかたちうごいてぱぴぷぺぽ』	元永定正/作	光村図書
			絵本	『ストライプ』	デヴィッド・シャノン/作	セーラー出版
			絵本	『小さな池』	新宮晋/作	福音館書店
			おはなし	「漁師とおかみさん」		
泉佐野市	1		おはなし	「マーシャとくま」	ブラトフ/再話　うちだりさこ/やく	福音館書店
			絵本	『クマがふしぎにおもっていたこと』	ヴォルフ・エアルブルッフ/作	ブックローン出版
			おはなし	「オオカミのおばあさん」『中国民話集　巨人ニジガロ』		日本中国友好協会
			絵本	『3びきのかわいいオオカミ』	ユージーン・トリビザス文　こだまともこ訳	冨山房
泉佐野市	1		絵本	『こいしがどしーん』	内田麟太郎・長新太	童心社
			おはなし	「アナンシと五」		
			絵本	『コワフの消えた鼻』		長崎出版
			おはなし	「旅人馬」		
			絵本	『たいようオルガン』		アートン
泉佐野市	1		絵本	『ふしぎなナイフ』		福音館書店
			おはなし	「ならなしとり」		
			絵本	『ウエズレーの国』		あすなろ書房
			おはなし	「漁師とおかみさん」		

茨木市	1	人間関係（いろんな思い）	絵本	『いちはかたつむり、じゅうはかに』	APセイヤー・Jセイヤー／作	評論社
			おはなし	「鬼の面」		
			おはなし	「あるだんなさんとおかみさんの話」『愛蔵版おはなしのろうそく』	東京子ども図書館/編	
			絵本	『モチモチの木』	斉藤隆介／作	岩崎書店
			詩	「かまきり」		冨山房
茨木市	1	人間関係（いろんな思い）	絵本	『いつもちこくのおとこのこ　ジョン・パトリック・ノーマンマクヘネシー』	ジョン・バーニンガム／作	あかね書房
			おはなし	「きつねとかわうそ」	松谷みよ子／／作	講談社
			おはなし	「北風に会いに行った少年」『愛蔵版おはなしのろうそく13』	東京子ども図書館/編	東京こども図書館
			絵本	『どんな　きぶん？』	サクストン・フライマン＆コースト・ロレファーズ	
茨木市	1	人間関係（いろんな思い）	おはなし	『エパミナンダス』	東京子ども図書館/編	東京こども図書館
			絵本	『キツネ』	マーガレット・ワイルド／作	BL出版
			おはなし	「はなたれ小僧さま」	松谷みよ子／作	講談社
			おはなし	「マーリャンと魔法の筝」	君島久子／作	偕成社
茨木市	1	人間関係（いろんな思い）	絵本	『いやといったピエロ』	ミーシャ・ダムジャム／作	セーラー出版
			おはなし	「ドシュマンとドースト」	松岡享子	福音館書店
			おはなし	「山手の吊鐘」	宇津木秀甫／再話	
			詩			
茨木市	2	いろんな仕事	おはなし	「だんまりくらべ」	大川悦生／作	実業之日本社
			絵本	『いやといったピエロ』	ミーシャ・ジャムダン／作	セーラー出版
			おはなし	「きっちょむさんの話」		
			おはなし	「小石投げ名人タオ・カム」		
茨木市	2		絵本	『すくすきだいすき』	ピュートル・ウィルコン／作	セーラー出版
			おはなし	「夢見小僧」	稲田和子	こぐま社
			おはなし	「おおきな　おおきな木」	横田きよし／作	金の星社
			絵本	『こぶたは　大きい』	ダクラス・フロリアン／作	BL出版
茨木市	2	いろんな仕事（沖縄について）	絵本	『赤牛モウサー』	儀間比呂志	岩崎書店
			おはなし	「さんねん　ねたろう」	木暮正夫／作	世界文化社
			絵本	『メアリー・スミス』	アンドレア・ユーレン／作	光村教育図書
			おはなし	「つるのよめさま」	大川悦生／作	講談社
茨木市	2	いろんな仕事（沖縄について）	絵本	『赤牛モウサー』	儀間比呂志	岩崎書店
			おはなし	「茨木　童子」	宇津木秀甫／　再話	
			おはなし	「首のすげかえ」	埼玉県民話	
			おはなし	「山寺の吊鐘」	宇津木秀甫／　再話	
茨木市	1		おはなし	「北風に会いに行った少年」『愛蔵版おはなしのろうそく13』	東京子ども図書館／編	東京子ども図書館
			絵本	『どんなきぶん？』	サクストン・フライマン＆コースト・ロレファーズ／作　アーサー・ビナード／訳	福音館書店
			おはなし	「おどっておどってぼろぼろになったくつ」『愛蔵版おはなしのろうそく13』	東京子ども図書館／編	東京子ども図書館
			絵本	『ふたり』	瀬川康男／作	冨山房
茨木市	1		絵本	『こぶたは大きい』		
			おはなし	「大きなおおきな木」『大きなおおきな木』	横田清／文	
			おはなし	「め鹿坂の話」奈良昔話		
			おはなし	「あみだ池のたぬき」大坂昔話		
			詩	『ポケット詩集』		童話屋
			おはなし	「山寺の釣鐘」日本昔話		
茨木市	1		おはなし	「アナシンと五」『子どもに聞かせる世界の民話』		実業之日本社
			絵本	『かさどろぼう』スリランカのお話	シビル・ウェスタシンハ	福武書店
			おはなし	「猿のいきぎも」『とんとん昔』	小松崎進	鳩の森文庫
			絵本	『ふしぎなナイフ』『こどものとも』	中村牧江・林健造／作	福音館書店
			おはなし	『鬼の面』大阪の昔話	大阪府小学校国語科教育研究会／編	
茨木市	1		絵本	『いわしくん』	菅原たくや／作	文化出版局
			おはなし	『丹波の山の大男』大阪の昔話	宇津木秀甫／再話	日本標準
			絵本	『とらよりこわいほしがき』	小沢清子／文　太田大八／絵	太平出版
			おはなし	『さんねん峠』朝鮮の昔話	李錦玉／作	フォア文庫
			おはなし	「だんだんのみ」『日本の昔話5』	おざわとしお	福音館書店
茨木市	1		絵本	『光の旅　かげの旅』	アン・ジョナス／著　内海まお／訳	評論社
			おはなし	『マーシャと白い鳥』ロシアの昔話	ミハイル・プラートフ／再話	偕成社
			おはなし	『座頭の木』日本の昔話	松谷みよ子	講談社
			絵本	『ともだち』	谷川俊太郎	玉川大学出版部
大阪市	1		大型絵本	『おおはくちょうのそら』	手島圭三郎／作	リブリオ出版
			絵本	『ふしぎなナイフ』	中村牧江／作　林健造／作	福音館書店
			絵本	写真絵本『あさの絵本』	谷川俊太郎／文　吉村和俊／写真	アリス館
			絵巻物	「くもの糸」	芥川龍之介／作　金田治子／製作	
			絵本	『てをみてごらん』	中村牧江／作	PHP研究所

大阪市	1		絵本	『鹿よおれの兄弟よ』	神沢利子／作 G・D・パヴリーシン／絵	福音館書店
			絵本	『ふしぎなナイフ』	中村牧江／作　林健造／作	福音館書店
			おはなし	「ことりをすきになった山」	アリス・マクレーラン／文	偕成社
			紹介	『モーターサイクルダイアリーズ』	チェ・ゲバラ／著	福音館書店
			紹介	『モーターサイクル南米旅行』	チェ・ゲバラ／著	角川文庫
			紹介	『スマッジがいうから』	ナン・グレゴリー／作	現代企画室
			紹介	『魔法のドロップ』	松田幸久／著	あかね書房
			紹介	『モモ』	ミヒャエル・エンデ／作	岩波書店
大阪市	1	心の目／文明の危機	絵本	点字絵本「木の根橋」	ふじたふみえ／文　かわむらたつし／絵	アスカ
			おはなし	『今日からはあなたの盲導犬』	日野多香子／文　増田勝正／絵	岩崎書店
			紹介	回覧　さわる絵本（熊取グループ制作）		
			紹介	回覧　さわる絵本「わかるかな？」グループそよかぜ　点字サークルにじ制作		
			おはなし	朗読「おーいでてこい」『世界SF全集巻28』	星新一	早川書房
大阪市	1		絵本	『ゆずちゃん』	肥田美代子／文　石倉欣二／絵	ポプラ社
			絵本	『ひさの星』		岩崎書店
			おはなし	「みそ買い橋」『子どもに語る日本の昔話』	斉藤隆夫／文　いわさきちひろ／絵	こぐま社
			紹介	「わらしべ長者」日本民話選		岩波少年文庫
大阪市	1	民話を楽しむ	絵本	『いのちのつながり』	中村運／文　佐藤直行／絵	
			絵本	『おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん』	長谷川義史	
			詩	「二万二千個の遺伝子」『いのちのバトン』	日野原重明	
			おはなし	「なら梨とり」『子どもに語る日本の昔話』	稲田和子・筒井悦子	こぐま社
大阪市	1	一冊の本との出合い	絵本	落語絵本「えんかつぎのだんなさん」	桂文我／話　梶山俊夫／絵	
			紹介	『じごくのそうべえ』		
			紹介	『そばせい』		
			紹介	『たがや』		
			紹介	『じゅげむ』		
			絵本	『ぼちぼちいこか』	マイク・セイラ／作 ロバート・グロスマン／絵	偕成社
			絵本	写真絵本『オーロラの向こうに』	松本紀生	教育出版
			紹介	『LOVE　in　Alasskaー星のような物語』	星野道夫／著	小学館
			紹介	『アラスカたんけん記』	星野道夫／著	
			紹介	『ナヌークの贈りもの』	星野道夫／著	小学館
			紹介	『クマよ』	星野道夫／著	福音館書店
大阪市	1		絵本	『ライト兄弟』	鶴見正夫／文　徳田秀雄／絵	ひさかたチャイルド
			絵本	写真絵本『みんなおなじでもみんなちがう』	奥井一満／文　得能通弘／写真	福音館書店
			詩	「わたしと小鳥とすずと」	金子みすゞ	
			絵本	『おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん』	長谷川義史	
			詩	「いのちのバトン」	相田みつを	
			詩	「手紙ー15才のきみへ」	アンジェラ・アキ	
大阪市	2		おはなし	『ゆきおんな』		ポプラ社
			おはなし	『なんでも見える鏡』	フィツォフスキ／再話　内田莉莎子／訳　スズキコージ／画	福音館書店
			おはなし	「エパミナンダス」『おはなしのろうそく』		東京こども図書館
			絵本	『鳥の島』	川端誠／作	BL出版
大阪市	2		おはなし	『ほうすけのひよこ』	谷川俊太郎／作	解放出版社
			おはなし	『うさぎのさいばん』	キムセシル／ぶん　ハンテヒ／え かみやにじ／やく	少年写真新聞社
			おはなし	「旅人馬」『子どもに語る日本の昔話』		こぐま社
			絵本	『ラブ・ユー・フォーエバー』	ロバート・マンチ／作　乃木りか／訳　梅田俊作／絵	岩崎書店
			絵本	『かんちがい』	吉田遠志／絵と文	福武書店
大阪市	2		詩	『のはらうた』	工藤直子	童話屋
			絵本	『こんにちワニ』	中川ひろたか／文 村上康成／絵	PHP研究所
			おはなし	「熊の皮を着た男」『子どもに語るグリムの昔話』		こぐま社
			おはなし	『ごろはちだいみょうじん』	中川正文／さく　梶山俊夫／え	福音館書店
			絵本	『まるをさがして』	大月ヒロ子／構成・文	福音館書店
大阪市	2		おはなし	『天からふってきたお金』	アリス・ケルジー／文　岡村和子／訳	岩波書店
			おはなし	「ぼた餅は毒」（大阪の昔話）		
			絵本	『どんなきぶん？』	サクストン・フライマン／作　ユースト・エルファーズ／作　アーサー・ビナード／訳	福音館書店
			絵本	『THE　CARROT　SEED』（原書）		

大阪市	2		絵本	『これはのみのぴこ』	谷川俊太郎／作　和田誠／絵	サンリード
			おはなし	「ふしぎなお客」『イギリスとアイルランドの昔話』	石井桃子／編・訳	福音館書店
			おはなし	「三つの金曜日」『天からふってきたお金』	アリス・ケルジー／文　岡村和子／訳	岩波書店
			絵本	『綱渡りの男』	モーディカイ・ガーステイン／作　川本三郎／訳	小峰書店
大阪市	1	数字	おはなし	「四人のなまけ者」『愛蔵版おはなしのろうそく　8』	東京子ども図書館／編	東京子ども図書館
			絵本	『桃源郷ものがたり』	松居直／文　蔡皐／絵	福音館書店
			ブックトーク	『ボクたちの値段』	荻原博子／監修	小峰書店
			ブックトーク	『あたまにつまった石ころが』	キャロル・オーティス・ハースト／文　ジェイムズ・スティーブンソン／絵　千葉茂樹／訳	光村教育図書
			ブックトーク	『死体ばんざい』（星新一YAセレクション）	星新一／作	理論社
			ブックトーク	『リヤカーマン　アフリカを行く』	永瀬忠志／文・写真　勝又進／絵	学研
			ブックトーク	『星の王子さま』（愛蔵版）	サン＝テグジュペリ／作　内藤濯／訳	岩波書店
大阪市	1	ふしぎ	おはなし	「きつねの窓」『安房直子コレクション　1』	安房直子／作　北見葉胡／画	偕成社
			ブックトーク	『へんしんトンネル』	あきやまただし／作・絵	金の星社
			ブックトーク	『ねぶそくの牧師さん』	ロアルド・ダール／作　久山　太市／訳　クェンティン・ブレイク／絵	評論社
			ブックトーク	『白狐魔記　源平の風～戦国の雲』	斉藤洋／作　高畠純／画	偕成社
			ブックトーク	『視覚ミステリーえほん』	ウォルター・ウィック／作　林田康一／訳	あすなろ書房
			ブックトーク	『わたしと小鳥とすずと　金子みすゞ童謡集』	金子みすゞ／著	JULA出版局
大阪市	3		絵本	『どうぶつにふくをきせてはいけません』	ジュディ　バレット／文　ロン・バレット／画	朔北社
			おはなし	「エパミナンダス」『愛蔵版おはなしのろうそく』	東京子ども図書館／編	東京子ども図書館
			絵本	『からすたろう』	やしま　たろう／文・絵	偕成社
			絵本	『これはのみのぴこ』	谷川俊太郎／作　和田誠／絵	サンリード
			おはなし	「ラプンツェル」『愛蔵版おはなしのろうそく』	東京子ども図書館／編	東京子ども図書館
大阪市	1		絵本	『いろいきてる！』	谷川俊太郎／文　元永定正／絵	福音館書店
			おはなし	「コートのお話」		
			絵本	『だいくとおにろく』	松居直／再話　赤羽末吉／画	福音館書店
			詩	「つくつくづくし」『おはなしおばさんの詩でダンス・ダンス』	藤田浩子／編著　近藤理恵／絵	一声社
			絵本	『ビッグ・オーとの出会い』	シェル・シルヴァスタイン／著　倉橋由美子／訳	講談社
			ブックトーク			
大阪市	1		絵本	『すきですゴリラ』	アントニー・ブラウン／作・絵　山下明生／訳	あかね書房
			おはなし	『王さまのうま』	マイケル・フォアマン／さく　じんぐうてるお／やく	ほるぷ出版
			おはなし	「しんぺいとうざ」『日本の民話　近畿地方2』	石浜じゅん子／他文　赤坂三好／他絵	世界文化社
			絵本	『風切る翼』	木村裕一／作　黒田征太郎／絵	講談社
			詩	「僕はまるでちがって」『詩の玉手箱』	三木卓／編　柚木沙弥郎／絵	いそっぷ社
大阪市	1		おはなし	「ポンイミと殿様」『さんねん峠』	李　錦玉／作　朴　民宜／画	岩崎書店
			おはなし	『ダンデライオン』	ドン・フリーマン／さく　アーサー・ビナード／やく	福音館書店
			おはなし	『むらの秀雄』	わたなべしげお／文　にしむらしげお／絵	ペンギン社
			絵本	『半日村』	斎藤隆介／作　滝平二郎／絵	岩崎書店
大阪市	1		絵本	『えんぎかつぎのだんなさん』	桂文我／話　梶山俊夫／絵	福音館書店
			おはなし	「ふくろうのそめものや」		
			おはなし	「ついでにペロリ」		東京こども図書館
			絵本	『百羽のツル』	花岡大学／作　戸田幸四郎／画	戸田デザイン研究室
			絵本	『ねえ！』		
大阪市	2		おはなし	『むらの秀雄』	わたなべしげお／文　にしむらしげお／絵	ペンギン社
			絵本	『えんぎかつぎのだんなさん』	ドン・フリーマン／さく　アーサー・ビナード／やく	福音館書店
			おはなし	「死人の恩返し」『子どもに語るイタリアの昔話』	剣持弘子／訳・再話	こぐま社
			ブックトーク	『精霊の守り人』	上橋菜穂子／作　二木真希子／絵	偕成社
			ブックトーク	『ツバル』	遠藤秀一／写真・文　本橋靖昭／イラスト	国土社
			ブックトーク	『都会（まち）のトム＆ソーヤ』	はやみねかおる／〔著〕　にしけいこ／画	講談社
			ブックトーク	『ぼくの見た戦争』	高橋邦典／写真・文	ポプラ社

大阪市	2		おはなし	「えんま大王の失敗」『ふるさとお話の旅　奈良・大阪』	大西登貴子／編　谷川ひろみつ／さし絵	ペンギン社
			絵本	『風切る翼』	木村裕一／作　黒田征太郎／絵	講談社
			おはなし	「ポンイミと殿様」『さんねん峠』	李錦玉／作　朴民宜／画	岩崎書店
			ブックトーク	『精霊の守り人』	上橋菜穂子／作　二木真希子／絵	偕成社
			ブックトーク	『ツバル』	遠藤秀一／写真・文　本橋靖昭／イラスト	国土社
			ブックトーク	『都会（まち）のトム＆ソーヤ』	はやみねかおる／〔著〕にしけいこ／画	講談社
			ブックトーク	『ぼくの見た戦争』	高橋邦典／写真・文	ポプラ社
大阪市	2		おはなし	「ついでにペロリ」		東京こども図書館
			おはなし	「しんぺいとうざ」『日本の民話　近畿地方2』	石浜じゅん子／他文　赤坂三好／他絵	世界文化社
			絵本	『これがほんとの大きさ！』	スティーブ・ジェンキンズ／作　佐藤見果夢／訳	評論社
			ブックトーク	『精霊の守り人』	上橋菜穂子／作　二木真希子／絵	偕成社
			ブックトーク	『ツバル』	遠藤秀一／写真・文　本橋靖昭／イラスト	国土社
			ブックトーク	『都会（まち）のトム＆ソーヤ』	はやみねかおる／〔著〕にしけいこ／画	講談社
			ブックトーク	『ぼくの見た戦争』	高橋邦典／写真・文	ポプラ社
大阪市	2		おはなし	「くぎスープ」『スウェーデンの森の昔話』	アンナ・クララ・ティードホルム／編絵　うらたあつこ／訳	ラトルズ
			絵本	『ストライプ』	デヴィッド・シャノン／文と絵　清水奈緒子／訳	セーラー出版
			おはなし	『島ひきおに』	山下明生／文　梶山俊夫／絵	偕成社
			ブックトーク	『精霊の守り人』	上橋菜穂子／作　二木真希子／絵	偕成社
			ブックトーク	『ツバル』	遠藤秀一／写真・文　本橋靖昭／イラスト	国土社
			ブックトーク	『都会（まち）のトム＆ソーヤ』	はやみねかおる／〔著〕にしけいこ／画	講談社
			ブックトーク	『ぼくの見た戦争』	高橋邦典／写真・文	ポプラ社
大阪市	1		おはなし	「十二支の由来」『読みがたり大阪のむかし話』	大阪府小学校国語科教育研究会／編	日本標準
			詩	「黄色い鳥のいる風景」『クレーの絵本』	パウル・クレー／絵　谷川俊太郎／詩	講談社
			おはなし	朗読「鳥」『記憶のつくり方』	長田弘	晶文社
			絵本	『もこ　もこもこ』	谷川俊太郎／作　元永定正／絵	文研出版
			おはなし	「三つの金曜日」『天からふってきたお金』	アリス・ケルジー／文　岡村和子／訳	岩波書店
			おはなし	「ねずみ経」『子どもに語る日本の昔話』	稲田和子／著　筒井悦子／著	こぐま社
			ブックトーク	『星をまく人』	キャサリン・パターソン／著　岡本浜江／訳	ポプラ社
			ブックトーク	『お話を運んだ馬』	I. B. シンガー／作　工藤幸雄／訳	岩波書店
大阪市	1	絵本には・・・	絵本	『光の旅かげの旅』	アン・ジョナス／著　内海まお／訳	評論社
			絵本	『おまえうまそうだな』	宮西達也／作	ポプラ社
			おはなし	「りんご娘ニーナ」『子どもに語るイタリアの昔話』	剣持弘子／訳・再話	こぐま社
			絵本	『きつねにょうぼう』	長谷川摂子／再話　片山健／絵	福音館書店
			絵本	『どんなきぶん？』	サクストン・フライマン／作　ユースト・エルファーズ／作　アーサー・ビナード／訳	福音館書店
			ブックトーク	『みずならのいのち』	手島圭三郎／作	リブリオ出版
			ブックトーク	『エゾオオカミ物語』	あべ弘士／作	講談社
			ブックトーク	『生命の樹』（チャールズ・ダーウィンの生涯）	ピーター・シス／作　原田勝／訳	徳間書店
			ブックトーク	『じゅうにしのものがたり』	瀬田康男／作	グランまま社
			ブックトーク	『つるにょうぼう』	矢川澄子／文　赤羽末吉／絵	福音館書店
			ブックトーク	『ジュマンジ』	クリス・ヴァン・オールズバーグ／絵と文　へんみまさなお／訳	ほるぷ出版
			ブックトーク	『急行「北極号」』	クリス・ヴァン・オールズバーグ／絵と文　村上春樹／訳	あすなろ書房

大阪市	1	宇宙	絵本	『きみの町に星をみているねこはいないかい？』	えびなみつる／作	架空社
			絵本	『ちきゅう』	ブライアン・カラス／作　庄司太一／訳	偕成社
			ブックトーク	写真絵本『宇宙をみたよ！』	毛利衛／監修　宙野素子／文	偕成社
			ブックトーク	『宇宙においでよ！』	野口聡一／著	講談社
			絵本	『かぐや姫』	千葉幹夫／文・構成　織田観潮／画	講談社
			ブックトーク	『竹取物語』	森山京／文　宇野亜喜良／絵	ポプラ社
			ブックトーク	『竹取物語』	星新一／訳	角川文庫
大阪市	1	言葉をたのしむ	絵本	『これは　のみの　ぴこ』	谷川俊太郎／作　和田誠／絵	サンリード
			おはなし	「三つの金曜日」『天からふってきたお金』		岩波書店
			おはなし	「ふしぎなお客」『イギリスとアイルランドの昔話』		福音館書店
			絵本	『綱渡りの男』	モーディカイ・ガースティン／作　川本 三郎／訳	小峰書店
			ブックトーク	『ポケット詩集・Ⅱ』	田中和雄／編	童話屋
			ブックトーク	『おおきに　おおさか』	島田陽子／著	編集工房ノア
			ブックトーク	『ぞうからかうぞ』	石津ちひろ／文　藤枝リュウジ／絵	BL出版
大阪市	1		絵本	『はつてんじん』	川端誠／作	クレヨンハウス
			おはなし	「エパミナンダス」『おはなしのろうそく』		東京こども図書館
			おはなし	「ゆきおんな」		ポプラ社
			おはなし	「なんでも見える鏡」	フィツォフスキ／再話　内田莉莎子／訳　スズキコージ／画	福音館書店
大阪市	1		おはなし	『ほうすけのひよこ』	谷川俊太郎／作　梶山俊夫／絵	解放出版社
			おはなし	『うさぎのさいばん』	キムセシル／ぶん　ハンテヒ／えかみやにじ／やく・解説	少年写真新聞社
			おはなし	「旅人馬」『子どもに語る日本の昔話』	稲田和子／著　筒井悦子／著	こぐま社
			絵本	『ラヴ・ユー・フォーエバー』	ロバート・マンチ／作　乃木りか／訳　梅田俊作／絵	岩崎書店
			絵本	『かんちがい』	吉田遠志／絵と文	福武書店
大阪市	2		おはなし	「エパミナンダス」		
			おはなし	「ゆきおんな」		
			絵本	『鳥の島』		
			おはなし	「なんでも見える鏡」		
			おはなし	「ぽとんぽとんはなんのおと」		
大阪市	2		おはなし	「エパミナンダス」		
			おはなし	「ゆきおんな」		
			絵本	『鳥の島』		
			おはなし	「なんでも見える鏡」		
大阪市	3		絵本	『どうぶつにふくをきせてはいけません』	ジュディ・バレット	朔北社
			おはなし	「エパミナンダス」『愛蔵版おはなしのろうそく1』		東京子ども図書館
			絵本	『からすたろう』	やしまたろう	偕成社
			絵本	『これはのみのぴこ』	谷川俊太郎	サンリード
			おはなし	「ラプンツェル」『愛蔵版おはなしのろうそく3』		東京子ども図書館
大阪市	2		絵本	『あさの絵本』	谷川俊太郎	アリス館
			絵本	『北のこぐまたち』	サリー・グリンドレー	評論社
			おはなし	『ふるさとお話の旅　奈良・大阪』		星の環
			絵本	『うしはどこでも「モ～！」』	E.. S. ﾜｲﾝｽﾃｨｰﾝ	鈴木出版
			おはなし	「三枚の鳥の羽」『おはなしのろうそく11』		東京子ども図書館
			絵本	『ことり』	中川ひろたか	金の星社
大阪市	1		おはなし	「十二支の由来」」『大阪のむかし話』		日本標準
			絵本	『おじいさんの旅』	アレン・セイ	ほるぷ出版
			おはなし	「あみだ池のたぬき」『ふる里お話の旅　奈良・大阪』		星の輪会
			おはなし	「ばけくらべ」	藤田浩子／再話	一声社
			絵本	『まちのコウモリ』	中川雄三	ポプラ社
			紙芝居	「さらやしきのおきく」	桂文我	教育画劇

大阪市	2		絵本	『わたし』	谷川俊太郎・長　新太	福音館書店
			絵本	『ペレのあたらしいふく』	エルサ・ベスコフ	福音館書店
			絵本	『だくちるだくちる』	阪田寛夫・長新太	福音館書店
			おはなし	「エパミナンダス」『愛蔵版おはなしのろうそく』		東京子ども図書館
			絵本	『よあけ』	シュルヴイッツ	福音館書店
			おはなし	「ゆきおんなのはなし」『日本の伝説　東日本編』		偕成社
			大型絵本	『おべんとくん』		チャイルド本社
大阪市	1		絵本	『ふしぎなナイフ』	中村牧江	福音館書店
			絵本	『よかったねネッドくん』（日本語、英語）	レミー・チャーリップ	偕成社
			おはなし	「ゆうかんな靴直し」『子どもに語るイタリアの昔話』		こぐま社
			絵本	『だるまさんが』		ブロンズ新社
			おはなし	「きつねとゆうびん屋さん」	たなかやすこ再話	
			絵本	『うえきばちです』	川端誠	BL出版
			絵本	『きらきら』	谷川俊太郎	アリス館
貝塚市	1		紙芝居	『めがねやどろぼう』	桂文我／脚本	童心社
			絵本	『紙芝居屋さん』	アレン・セイ	
			絵本	『まさ夢いちじく』	クリス・ヴァン・オールズバーグ／絵と文　村上春樹／訳	実業之日本社
			おはなし	「アナンシと五」『子ども世界の民話（下）』	内田莉莎子・君島久子・山内清子／著	実業之日本社
			おはなし	「やぎとライオン」『子ども世界の民話（上）』	内田莉莎子・君島久子・山内清子／著	実業之日本社
			おはなし	「三枚のおふだ」『おはなしのろうそく5』		東京子ども図書館
			紹介	『ギルガメッシュ王ものがたり』	ルドミラ・ゼーマン／作　松野正子	岩波書店
			紹介	『ギルガメッシュ王のたたかい』	ルドミラ・ゼーマン／作　松野正子	岩波書店
			紹介	『ギルガメッシュ王さいごの旅』	ルドミラ・ゼーマン／作　松野正子	岩波書店
			紹介	『きつねがひろったイソップものがたり』1・2	安野光雅	岩波書店
			紹介	『御伽草子』古典文学全集13	北畠八穂	ポプラ社
			紹介	『一寸法師』	齋藤洋	
			紹介	『うらしま』	平岩弓枝	
			紹介	『酒呑童子』	川村たかし	ポプラ社
			紹介	『鉢かづき』	あまんきみこ	ポプラ社
			紹介	『ものくさ太郎』	岡田淳	
			紹介	『京の走り坊さん』	東義久	クレオ
			紹介	『紙芝居は楽しいぞ！』（岩波ジュニア新書）	鈴木常勝	岩波書店
貝塚市	1		絵本	『ふしぎなナイフ』	中村牧江・林建造／作　福田隆義／絵	福音館書店
			おはなし	「三匹の子ブタ」『イギリスとアイルランドの昔話』	ジョーゼフ・ジェイコブズ／再話　石井桃子／編・訳　J・D・バトン／画	福音館書店
			おはなし	「エパミナンダス」『愛蔵版おはなしのろうそく1』	ブライアント／作　松岡享子／訳	東京子ども図書館
			絵本	『色の女王』	ユッタ・バウアー／作	小学館
			絵本	『ありがとうフォルカー先生』	パトリシア・ポラッコ	岩崎書店
			絵本	『西遊記・［一］石から生れた孫悟空』	唐亜明／文　于大武／絵	偕成社
			絵本	『いっぽんばしわたる』	五味太郎／作・画	絵本館
			紹介	『世にも不幸なできごとシリーズ』	レモニー・スニケット	草思社
			紹介	『ギルガメッシュ王ものがたり』	ルドミラ・ゼーマン／作　松野正子	岩波書店
			紹介	『ギルガメッシュ王のたたかい』	ルドミラ・ゼーマン／作　松野正子	岩波書店
			紹介	『ギルガメッシュ王さいごの旅』	ルドミラ・ゼーマン／作　松野正子	岩波書店
			紹介	『きつねがひろったイソップものがたり』1・2	安野光雅	岩波書店
			紹介	『御伽草子』古典文学全集13	北畠八穂	ポプラ社
			紹介	『一寸法師』	齋藤洋	
			紹介	『うらしま』	平岩弓枝	
			紹介	『酒呑童子』	川村たかし	ポプラ社
			紹介	『鉢かづき』	あまんきみこ	ポプラ社
			紹介	『ものくさ太郎』	岡田淳	
			紹介	『京の走り坊さん』	東義久	クレオ
			紹介	『紙芝居は楽しいぞ！』（岩波ジュニア新書）	鈴木常勝	岩波書店
岸和田市	2	あなたの知らない不思議な世界	詩	「おはつ」	工藤直子／作	小学館
			おはなし	「はなたれ小僧さま」『子どもに語る日本の昔話』		こぐま社
			絵本	『まさ夢いちじく』	オールズバーグ／作	河出書房新社
			紹介	『視覚ミステリー』	ウォルター・ウィック／作　林田康一／訳	あすなろ書房
			おはなし	「金の腕」『おはなしのろうそく22』		東京子ども図書館
			絵本	『雪女』	小泉八雲	偕成社
			紹介	『怪談』	小泉八雲	偕成社文庫
			絵本	『ぞくぞくぞぞぞ』		フレーベル館
			紹介	『生れたときから「妖怪」だった』	水木しげる	講談社α文庫
			紹介	『ボクの一生はゲゲゲの楽園だ』	水木しげる	講談社コミック
			紹介	『妖怪アパートの幽雅な日常』①～③	香月日輪	講談社

岸和田市	2	あなたの知らない不思議な世界	詩	「せんせいおこるのすきやなあ」		
			おはなし	「小石投げの名人　タオ・カム　」		
			絵本	『まさ夢いちじく』		
			紹介	『視覚ミステリー』		
			紹介	『ラン』		
			紹介	『13ヶ月と13週と13日と満月の夜』		
			紹介	『だいふくもち』		
			おはなし	「金の腕」		
熊取町	1	＊順不同です。	おはなし	「三人の旅人」『しずくの首飾り』		
			おはなし	「馬とヒキガエル」『魔法のオレンジの木』		
			おはなし	「ふしぎなお客」『イギリスとアイルランドの昔話』		
			おはなし	「きっちょむばなし」		
			おはなし	「しょうがないヤギ」『黒いお姫さま』		
			おはなし	「エパミナンダス」『おはなしのろうそく1』		
			本の紹介	『ものいうなべ』ほか10冊		
吹田市	1		絵本	『ひゅるひゅる』	せなけいこ	童心社
			おはなし	『やまんばの木』	木暮正夫	佼成出版社
			絵本	『ひとのいいねこ』	南部和也	小学館
			おはなし	『雪女』	松谷みよ子	ポプラ社
			おはなし	「ちっちゃいちっちゃい」『イギリスとアイルランドの昔話』		福音館書店
吹田市	1		絵本	『ひゅるひゅる』	せなけいこ	童心社
			おはなし	『やまんばの木』	木暮正夫	佼成出版社
			絵本	『ひとのいいねこ』	南部和也	小学館
			おはなし	『雪女』	松谷みよ子	ポプラ社
			おはなし	「ちっちゃいちっちゃい」『イギリスとアイルランドの昔話』		福音館書店
吹田市	1		絵本	『ひゅるひゅる』	せなけいこ	童心社
			おはなし	『やまんばの木』	木暮正夫	佼成出版社
			絵本	『ひとのいいねこ』	南部和也	小学館
			おはなし	『雪女』	松谷みよ子	ポプラ社
			おはなし	「ちっちゃいちっちゃい」『イギリスとアイルランドの昔話』		福音館書店
			おはなし	「ばばいるか」日本の昔話		
吹田市	1		絵本	『ないた』	中川ひろたか／文　長心太／絵	金の星社
			おはなし	「トラになったマーじいさん」『タイの昔話』	吉川利治／編訳	偕成社
			絵本	『きちょうめんななまけもの』	ねじめ正一／文　村上康成／絵	教育画劇
			おはなし	「おんどりと二枚のきんか」『ルーマニアの民話』	安藤美紀夫／文	ポプラ社
			おはなし	「金の腕」イギリスの昔話『おはなしのろうそく22』		東京こども図書館
吹田市	1		詩	詩「ふゆのひ」「やまのこもりうた」『のはらうたⅠ』	工藤直子	童話屋
			絵本	『がいこつ』	谷川俊太郎	教育画劇
			おはなし	「おんどりと二枚のきんか」『ルーマニアの民話』	安藤美紀夫／文	ポプラ社
			絵本	『ふゆのせいざオリオン』	矢板康麿	福音館書店
			おはなし	「トラになったマーじいさん」『タイの昔話』	吉川利治／編訳	偕成社
			おはなし	「金の腕」『おはなしのろうそく22』		東京こども図書館
吹田市	1		おはなし	「アナンシと五」『子供に聞かせる世界の民話』		実業之日本社
			おはなし	「おばあさんと孫」『北部カメルーンフルベ族の民話説話集』	江口一久／探話	国立民族学博物館
			絵本	『みりょくのみ』	五味太郎	クレヨンハウス
			おはなし	「鬼の面」『大阪むかし話』		日本標準
吹田市	1		おはなし	「アナンシと五」『子供に聞かせる世界の民話』		実業之日本社
			おはなし	「おばあさんと孫」『北部カメルーンフルベ族の民話説話集』	江口一久／探話	国立民族学博物館
			絵本	『みりょくのみ』	五味太郎	クレヨンハウス
			おはなし	「鬼の面」『大阪むかし話』		日本標準
			絵本	『ぼくがラーメン食べてるとき』	長谷川義史	教育画劇
吹田市	2	おいしい秋	絵本	『やさい』	平山和子	福音館書店
			おはなし	「ならなしとり」		
			絵本	『クッキーサーカス』	たむらしげる	架空社
			紹介	『シュトルーデルを焼きながら』	ジョアン・ロックリン/作　こだまともこ/訳　井江栄/絵	偕成社
豊中市	1		絵本	『ぽぱーぺぽぴぽっぷ』	おかざきけんじろう／絵　谷川俊太郎／文	クレヨンハウス
			おはなし	「ゆきんこ」『ストリーテリングについて』		子ども文庫の会
			おはなし	「ひまんじょくれ」『黒いさくらんぼ』		小澤昔ばなし研究所
			おはなし	「ものぐさジャック」『イギリスとアイルランドの昔話』		福音館書店
			絵本	『うえきばちです』	川端誠／作	BL出版
			絵本	『たにむらくん』	岡本けん／作	リブロポート
			絵本	『もこ　もこもこ』	谷川俊太郎／作　元永定正／絵	文研出版
			絵本	『光の旅かげの旅』	アン・ジョナス／作	評論社

豊中市	1		絵本	『やあ！ともだち』	クリス・ラシュカ／作・絵	
			おはなし	「ねずみ経」『子どもに語る日本の昔話　2』		こぐま社
			おはなし	『だいふくもち』	田島征三／さく・え	福音館書店
			おはなし	「小石投げの名人タオカム」『子どもに語る　アジアの昔話』		こぐま社
			絵本	『うえきばちです』	川端誠／作	BL出版
			絵本	『たにむらくん』	岡本けん／作	リブロポート
			絵本	『光の旅かげの旅』	アン・ジョナス／作	評論社
豊中市	1		絵本	『ぽぱーぺぽぴぽっぷ』	おかざきけんじろう／絵　谷川俊太郎／文	クレヨンハウス
			おはなし	「ゆきむすめ」『松谷みよ子の日本の昔話』		講談社
			おはなし	「さきざきさん」		岩波少女文庫
			おはなし	「ミアッカどん」『イギリスとアイルランドの昔話』		福音館書店
			絵本	「七人りきのおやじさま」『世界のむかし話』		学研
			絵本	『うえきばちです』	川端誠／作	BL出版
			絵本	『たにむらくん』	岡本けん／作	リブロポート
			絵本	『光の旅かげの旅』	アン・ジョナス／作	評論社
豊中市	1		絵本	『ぽぱーぺぽぴぽっぷ』	おかざきけんじろう／絵　谷川俊太郎／文	クレヨンハウス
			おはなし	「たのきゅう」『子どもに語る日本の昔話1』		講談社
			おはなし	「ミアッカどん」『イギリスとアイルランドの昔話』		岩波少女文庫
			おはなし	「食べられたやまんば」松谷みよ子の日本の昔話2		福音館書店
			おはなし	「七人りきのおやじさま」『世界のむかし話』		学研
			絵本	『うえきばちです』	川端誠／作	BL出版
			絵本	『たにむらくん』	岡本けん／作	リブロポート
			絵本	『光の旅かげの旅』	アン・ジョナス／作	評論社
豊中市	1		絵本	絵本『やあ！ともだち！』	おかざきけんじろう／絵　谷川俊太郎／文	クレヨンハウス
			おはなし	「おいしいおかゆ」『おはなしのろうそく1』		東京子ども図書館
			おはなし	「てんまのとらやん」『てんまのとらやん』		遊タイム出版
			おはなし	「山の上の火」		岩波書店
			絵本	『うえきばちです』	川端誠／作	BL出版
			絵本	『たにむらくん』	岡本けん／作	リブロポート
			絵本	『光の旅かげの旅』	アン・ジョナス／作	評論社
豊中市	1		絵本	『ふゆめがっしょうだん』	冨成忠夫、茂木透／写真　長新太／文	福音館書店
			おはなし	『12のつきのおくりもの』	内田莉莎子／再話　丸木俊／画	福音館書店
			紙芝居	『せかいー大きいはなし』	柴野民三／作　安井康二／画	教育画劇
			絵本	『5ひきの小オニがきめたこと』	サラ・ダイアー／作　毛利衛／訳	講談社
			おはなし	「まめことまもの」『子どもに聞かせる世界の民話』	矢崎源九郎／編	実業之日本社
			絵本	『光の旅かげの旅』	アン・ジョナス／作　内海まお／訳	評論社
豊中市	1		紙芝居	『ふくはうち　おにもうち』	藤田勝治／脚本・画	童心社
			おはなし	『つるにょうぼう』	矢川澄子／文　赤羽末吉／絵	福音館書店
			絵本	『はつてんじん』	川端誠／作	クレヨンハウス
			絵本	『5ひきの小オニがきめたこと』	サラ・ダイアー／作　毛利衛／訳	講談社
			絵本	『たにむらくん』	岡本けん／作	リブロポート
			絵本	『光の旅　かげの旅』	アン・ジョナス／著　内海　まお／訳	評論社
豊中市	1		絵本	『うえきばちです』	川端誠／作	BL出版
			おはなし	「うしかたとやまんば」『おはなしのろうそく　15』	松谷みよ子／作	東京こども図書館
			絵本	『たにむらくん』	岡本けん／作	リブロポート
			絵本	『ぜつぼうの濁点』	原田宗典／作　柚木沙弥郎／絵	教育画劇
			紙芝居	『じごくけんぶつ』	松谷みよ子／監修　水谷章三／脚本　藤田勝治／絵	童心社
			絵本	『光の旅　かげの旅』	アン・ジョナス／著　内海まお／訳	評論社
			詩	『会いたくて』	工藤直子／作　佐野洋子／絵	大日本図書
豊中市	1		おはなし	「はなたれこぞうさま」『日本の昔話2』	松谷みよ子／著	講談社
			おはなし	「4人のなまけもの」『おはなしのろうそく15』	松谷みよ子／作	東京こども図書館
			絵本	『たにむらくん』	岡本けん／作	リブロポート
			絵本	『キング牧師の力づよいことば　マーティン・ルーサー・キングの生涯』	ドーリン・ラパポート／文　ブライアン・コリアー／絵　もりうちすみこ／訳	国土社
			詩	『会いたくて』	工藤直子／作　佐野洋子／絵	大日本図書
			絵本	『光の旅　かげの旅』	アン・ジョナス／著　内海まお／訳	評論社
			紙芝居	『じごくけんぶつ』	松谷みよ子／監修　水谷章三／脚本　藤田勝治／絵	童心社
豊中市	1		絵本	『きらきら』	谷川俊太郎／文　吉田六郎／写真	アリス館
			絵本	『ちいさいおうち』	バージニア・リー・バートン／文・絵　石井桃子／訳	岩波書店
			おはなし	「王さまの耳はロバの耳」『子どもに聞かせる世界の民話』	矢崎源九郎／編	実業之日本社
			絵本	『うえきばちです』	川端試／作	BL出版
			絵本	『ナヌークの贈りもの』	星野道夫／著	小学館
			絵本	『だるまさんが』	かがくいひろし／さく	ブロンズ新社
			ブックトーク	（図書館司書による）		
豊中市	1		絵本	『きらきら』	谷川俊太郎／文　吉田六郎／写真	アリス館
			絵本	『ナヌークの贈りもの』	星野道夫／著	小学館
			おはなし	「王さまの耳はロバの耳」『子どもに聞かせる世界の民話』	矢崎源九郎／編	実業之日本社
			絵本	『うえきばちです』	川端試／作	BL出版
			絵本	『森の木』	川端誠／作	
			おはなし	「あくびがでるほどおもしろい話」『おはなしのろうそく5』	東京子ども図書館/編	東京こども図書館
			絵本	『光の旅　かげの旅』	アン・ジョナス／著　内海まお／訳	評論社
			ブックトーク	（図書館司書による）		

豊中市	1	環境問題	絵本	『もこ　もこもこ』	谷川俊太郎／作　元永定正／絵	文研出版
			おはなし	「おいしいおかゆ」（グリム）		
			絵本	『うえきばちです』	川端試／作	BL出版
			おはなし	「ひまんじょくれ」『黒いさくらんぼ』	福岡昔ばなし大学再話コース／再話	小沢昔ばなし研究所
			おはなし	「小石投げの名人タオロム」『子どもに語るアジアの昔話』	松岡享子／訳	こぐま社
			絵本	『たにむらくん』	岡本けん／作	リブロポート
			絵本	『光の旅　かげの旅』	アン・ジョナス／著　内海まお／訳	評論社
			絵本	『みみずのオッサン』	長新太／さく	童心社
豊中市	1	環境問題	絵本	『もこ　もこもこ』	谷川俊太郎／作　元永定正／絵	文研出版
			おはなし	「ばけくらべ」『松谷みよ子の本　8　むかしばなし』	松谷みよ子／著	講談社
			おはなし	『くわずにょうぼう』	稲田和子／再話　赤羽末吉／画	福音館書店
			おはなし	『山の上の火』	ハロルド・クーランダー／文　渡辺茂男／訳	岩波書店
			絵本	『うえきばちです』	川端試／作	BL出版
			絵本	『たにむらくん』	岡本けん／作	リブロポート
			絵本	『光の旅　かげの旅』	アン・ジョナス／著　内海まお／訳	評論社
豊中市	1	命、自然	おはなし	「はなたれこぞうさま」『日本の昔話2』	松谷みよ子／著	講談社
			おはなし	『つるにょうぼう』	赤羽末吉／画　矢川澄子／文	福音館書店
			絵本	『うえきばちです』	川端誠／作	BL出版
			絵本	『生きものピラミッド　みんなのいいぶん』	かみやしん／作	岩崎書店
			絵本	『5ひきの小オニがきめたこと』	サラ・ダイアー／作　毛利衛／訳	講談社
			紙芝居	『じごくけんぶつ』	松谷みよ子／監修　水谷章三／脚本　藤田勝治／画	童心社
東大阪市	2	命・生きること	絵本	『あさの絵本』	谷川俊太郎／文　吉村和敏／写真	アリス館
			絵本	『鹿よおれの兄弟よ』	神沢利子／作　G・D・パヴリーシン／絵	パロス舎
			紙芝居	『くまになったピアナ』	さねとうあきら／脚本　スズキコージ／画	
			絵巻物	「かえるをのんだととさん」	日野十戒　再話　齋藤隆夫／絵	福音館書店
			大型絵本	『おおはくちょうのそら』	手島圭三郎／作	リブリオ出版
東大阪市	2	生命　人と自然 生き物とのかかわり	絵本	『あさの絵本』	谷川俊太郎／文　吉村和敏／写真	アリス館
			絵本	『ギャバンじいさん』	舟崎克彦／文　井上洋介／絵	パロル舎
			絵本	『10人のきこり』	A・ラマチャンドラン／作　田島伸二／訳	
			紙芝居	『くまになったピアナ』	さねとうあきら／脚本　スズキコージ／画	
			絵本	『おおはくちょうのそら』	手島圭三郎／作	リブリオ出版
箕面市	1・2・3	食べ物	絵本	『うまそうだな　ねこ』		架空社
			おはなし	「くぎスープ」		
			絵本	『うしとトッケビ』	イ・サン／文　ハン・ビョンホ／絵	
			絵本	『みかんのひみつ』	日野十戒　再話　齋藤隆夫／絵	
			紙芝居	「おねぼうなじゃがいもさん」		
			紙芝居	手作り紙芝居「初夢の牛」		
守口市	1		絵本	『もこ　もこもこ』	谷川俊太郎／作　元永定正／絵	文研出版
			絵本	『じごくのそうべえ』	田島征彦	童心社
			絵本	『からすたろう』	八島太郎	偕成社
			紹介	『彼の手は語りつぐ』		
			紹介	『ありがとうフォルカー先生』		
守口市	1		詩	「わたしと小鳥とすずと」	金子みすゞ	
			おはなし	「アナンシと五」『子ども世界の民話（下）』	内田莉莎子・君島久子・山内清子／著	実業之日本社
			絵本	『じごくのそうべえ』	田島征彦	童心社
			絵本	『しまふくろうのみずうみ』	手島圭三郎／作	リブリオ出版
			絵本	『オオカミと石のスープ』	アナイス・ヴォージュラード／作　平岡敦／訳	徳間書店
守口市	1		おはなし	「あなのはなし」		
			おはなし	「王さまの耳はロバの耳」		
			絵本	『いしになったかりゅうど』	大塚勇三／再話　赤羽末吉／画	福音館書店
			絵本	『いつもちこくのおとこのこ　ジョン・パトリック・ノーマンマクヘネシー』	ジョン・バーニンガム／さく　たにかわしゅんたろう／やく	あかね書房
			絵本	『ふゆめがっしょうだん』	冨成忠夫、茂木透／写真　長新太／文	福音館書店
			絵本	『しまふくろうのみずうみ』	手島圭三郎／絵と文	
			絵本	『ぼちぼちいこか』	マイク＝セイラー／さく　バート＝グロスマン／え　いまえよしとも／やく	偕成社

守口市	1		おはなし	「ルンペルシュツルヘン」		
			おはなし	「とりつこうか　ひっつこうか」		
			絵本	『ふゆめがっしょうだん』	冨成忠夫、茂木透／写真　長新太／文	福音館書店
			絵本	『いろいろいろんな日』	ドクター・スース／作　スティーブ・ジョンソン／絵　ルー・ファンチャー／絵	BL出版
			絵本	『からすたろう』	やしまたろう／文・絵	偕成社
			詩	「よかったなあ」	まどみちお	
			詩	「かっぱ」	谷川俊太郎	
守口市	1		おはなし	「ルンペルシュツルヘン」		
			おはなし	「とりつこうか　ひっつこうか」		
			絵本	『ふゆめがっしょうだん』	冨成忠夫、茂木透／写真　長新太／文	福音館書店
			絵本	『いろいろいろんな日』	ドクター・スース／作　スティーブ・ジョンソン／絵　ルー・ファンチャー／絵	BL出版
			絵本	『からすたろう』	やしまたろう／文・絵	偕成社
			詩	「よかったなあ」	まどみちお	
			詩	「おねえちゃん」	佐藤信	
守口市	1		おはなし	『やまなしもぎ』	平野直／再話　太田大八／画	福音館書店
			おはなし	「三枚のお札」『おはなしのろうそく　5』	東京子ども図書館／編	東京子ども図書館
			絵本	『ヘリオさんとふしぎななべ』	市居みか／著	アリス館
			絵本	『月・人・石』	乾千恵／書　谷川俊太郎／文　川島敏生／写真	福音館書店
			絵本	『ロバのシルベスターとまほうのこいし』	ウィリアム・スタイグ／さく　せたていじ／やく	評論社
			詩	詩「がぎぐげごのうた」	まどみちお	
守口市	1		おはなし	「王さまの耳はロバの耳」 『子どもに聞かせる世界の民話』	矢崎源九郎／編	実業之日本社
			絵本	『こうしがうまれたよ』	海月清則／絵と文	福武書店
			絵本	『だいくとおにろく』		
			絵本	『みみずのかんたろう』	たじまゆきひこ／作	くもん出版
			絵本	『ペツエッティーノ』	レオ・レオーニ／作　谷川俊太郎／訳	好学社
			絵本	『きらい』	二宮由紀子／文　永島正人／絵	解放出版社
守口市	1		おはなし	「ルンペルシュツルヘン」『おはなしのろうそく』	東京子ども図書館／編	東京子ども図書館
			おはなし	「とりつこうかひっつこうか」		
			絵本	『ふゆめがっしょうだん』	冨成忠夫、茂木透／写真　長新太／文	福音館書店
			絵本	『びくびくビリー』	アンソニー・ブラウン／さく　灰島かり／やく	評論社
			絵本	『いろいろいろんな日』	ドクター・スース／作　スティーブ・ジョンソン／絵　ルー・ファンチャー／絵	BL出版
			絵本	『からすたろう』	やしまたろう／文・絵	偕成社
			絵本	『なんてったっておれさまがいちばんでかいかな』	ケビン・シェリー／さく　いまえよしとも／やく	BL出版
守口市	1		おはなし	『やまなしもぎ』		
			おはなし	「三枚のお札」		
			絵本	『ヘリオさんとふしぎななべ』	市居みか／著	アリス館
			絵本	『ロバのシルベスターとまほうのこいし』	ウィリアム・スタイグ／さく　せたていじ／やく	評論社
			絵本	『月・人・石』	乾千恵／書　谷川俊太郎／文　川島敏生／写真	福音館書店
守口市	1		詩	「わたしと小鳥とすずと」	金子みすゞ	
			絵本	『よあけ』	ユリー・シュルヴィッツ／作　瀬田貞二／訳	福音館書店
			おはなし	「アナンシと五」		
			絵本	『からすたろう』	やしまたろう／文・絵	偕成社
			絵本	『しまふくろうのみずうみ』	手島圭三郎／作	リブリオ出版
			絵本	『オオカミと石のスープ』	アナイス・ヴォージュラード／作　平岡敦／訳	徳間書店
			絵本	『じごくのそうべい』	田島征彦／作	童心社
			絵本	『もこもこもこ』	谷川俊太郎／作　元永定正／絵	文研出版
守口市	1		おはなし	「おばあさんとブタ」『愛蔵版おはなしのろうそく4』	東京子ども図書館/編	東京こども図書館
			おはなし	「ヤギとライオン」『子どもに聞かせる世界の民話』	矢崎源九郎/編	実業之日本社
			おはなし	「フォックス氏」 イギリスの昔話		

発行：大阪府子ども読書活動推進連絡協議会
事務局：財団法人 大阪国際児童文学館
URL：http://www.iiclo.or.jp/
TEL：06-6876-8800
FAX：06-6876-8686
〒565-0826　大阪府吹田市千里万博公園 10-6
大阪府立国際児童文学館内
平成２１（2009）年３月